住・まちづくりフォーラム かわら版

ニューズレター第 14 号　2002 年 2 月 13 日

特集：第 14 回住教育フォーラム
総合的な「まち学習」の方法と意味を問う
ー子どもも変わる、大人も変わる、
わくわくフィールドワークー

財団法人　住宅総合研究財団

14

第14回住教育フォーラムの記録

総合的な「まち学習」の方法と意味を問う

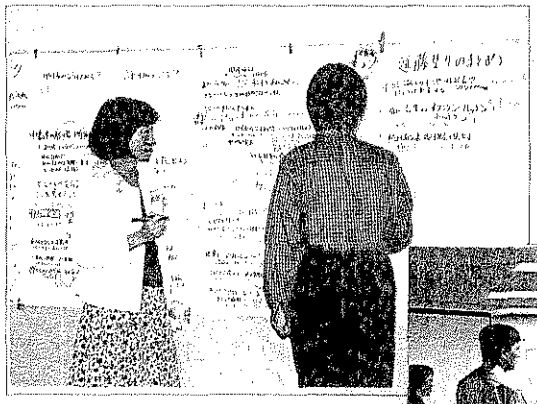
― 子どもが変わる、大人も変わる、わくわくフィールドワーク ―

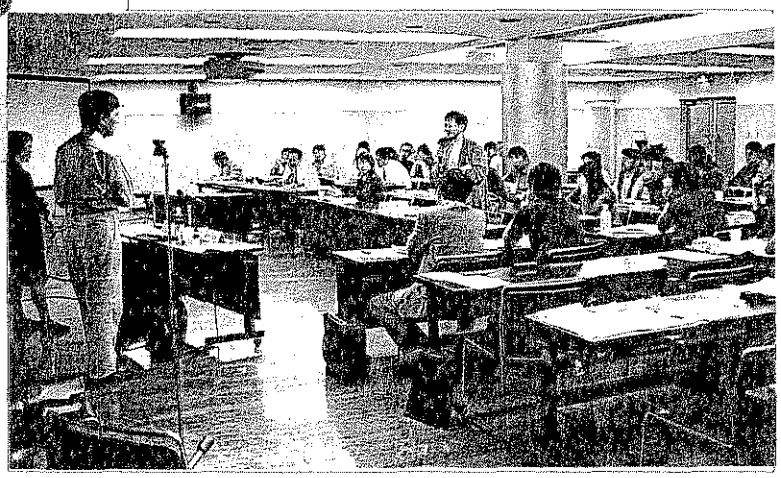
日　時：2001年10月13日(土)13:00～17:00
会　場：三茶しゃれなあどホール「オリオン」
講　師：木下　勇（千葉大学園芸学部助教授）
　　寺本　潔（愛知教育大学教育学部助教授）
　　吉川　仁（㈱防災＆都市づくり計画室代表）
参加者：建築・教育・まちづくりなどの研究者・実務者・
　　学生、市民活動グループメンバーなど59名

住教育委員会

委員長	延藤　安弘（千葉大学工学部教授）
委　員	小澤紀美子（東京学芸大学教育学部教授）
	木下　　勇（千葉大学園芸学部助教授）
	町田万里子（筑波大学附属小学校教諭）
	細田　洋子（建築と子供たちネットワーク仙台代表）
	奈須　正裕（立教大学文学部助教授）

＊所属・役職は開催当時





表･裏表紙カット：町田万里子
編集協力：星野諭
編集･文責：住教育委員会事務局 永田一雄、平井なか

〈主題解説〉

子ども参加・参画の事例から
ー「参加」から「参画」へー

木下　勇（千葉大学園芸学部助教授、
住総研住教育委員会委員、）

今回の企画をした住教育委員会では、「住まい、まち学習」をテーマに活動してきましたが、この２年半ぐらいは、秋はフォーラム、春に論文発表会という形でやっています。当初の活動の成果を、『まちはこどものワンダーらんど』（発行:風土社）として発行いたしました。社会的にもだんだん子どもたちを交えた学校と地域をつなぐいろいろな学習活動、まちづくり活動が展開し、来年度からの「総合的学習」の導入に合わせた動きも活発になってきています。そういう全国的な展開の中で、新たな課題も見つけながら、このような場を企画しています。

■子どもとまちの関わり方

今日は、「総合的な『まち学習』の方法と意味を問う～子どもが変わる、大人も変わる、わくわくフィールドワーク」というテーマ、その中でも特に子どもの主体性から見て「子どもの参加・参画」というところに絞って議論を進めたいと思います。子どもが変わると大人も変わるかもしれない、子どもから社会を変えることができるか、というような考えも、中には含まれているかもしれません。そういう面で子どもの参画、子どもの主体性を正面切って取り上げてみようということです。

今日は、２つの事例を発表していただきます。１番目は、愛知教育大の寺本先生に、西尾の小学校での取組み事例から、「まちの素材を生かして子どもも大人も輝く学び合い」というタイトルで講演していただきます。寺本先生は、地理学の専門から教育の分野で活躍されている方で、本も20冊以上書かれておられます。最初は、地理学的な、子どもの目線からの地図の読解きなどをやっておられまして、今は、まちの中を舞台に子どもたちが展開するまち学習についてやっておられます。

２番目は「防災まちづくり」です。旧建設省の時代から、防災まちづくりの事業を仕掛けながら、実際にいくつかの小学校でやってこられた、都市計画コンサルタント・プランナーの吉川仁さんと、地域とのかかわりで、太子堂２、３丁目まちづくり協議会を長年ずっと引っ張ってこられた梅津政之輔さんに来ていただいています。

このテーマには、複雑なまちづくりの課題というものを、どのように子どもたちが受け止めてやっていけるのか、という問題もあると思います。その辺に視点を置きながら、１番目の講演では「まちの素材を使った学習のあり方」、学校からの取組みと地域のそれへの反応について、２番目の講演では「地域の防災まちづくりをどのように子どもたちが受け止めるか」という組合わせです。

■子どもが参画するとは

ここで、子どもの参画について少し話をさせていただきます。『「参加」から「参画」』へとしましたが、なぜこんな「参画」という言葉を持ち出してくるか、という話ですが、実は、もう20年近く前に「三世代遊び場マップづくり」の活動をやりまして、「三世代遊び場図鑑」を1984年に仲間と作りました。その時は、まだ子どもらが道路で遊んでいました。しかし、その後の調査で、この太子堂などでも、こういう道路での遊びがあまり見られなくなってきて、ガキ大将集団からだんだん同年齢化しています。いま子どもたちが置かれている状況を考えても、だいぶ変わってきていることがわかると思います。私は、いちばん子どもが主体的に自ら考えて動くというのは遊びではないかと思っています。そういう遊びが変質してきた状況というのも、背景として考えなければなりません。そういう中で「参画」というようなことが非常に重要な課題になっていると思うのです。

私自身も世田谷で子どもたち参加のプログラムをやってきて、ロジャー・ハートの『CHILDREN' S PARTICIPATION』に出会い、ショックを受けました。この中の「子どもの参画のはしご」（図１）はアーンシュタインのモデルを子ども版に応用したもので、はしごの低い段に「操り」「お飾り」「形だけ」というレベルがあり、自分がやっていた中にもそういう類のものがあるのではないか、と思ったのです。「プロセスの最初から子どもが関わるのではなく、仕上がりのところだけ参加するのが多いが、そういうものは決して子どもの参画ではない」という話があって、自分もそういうこともやっていなくもないというような反省もしまして、非常にショックを受けました。

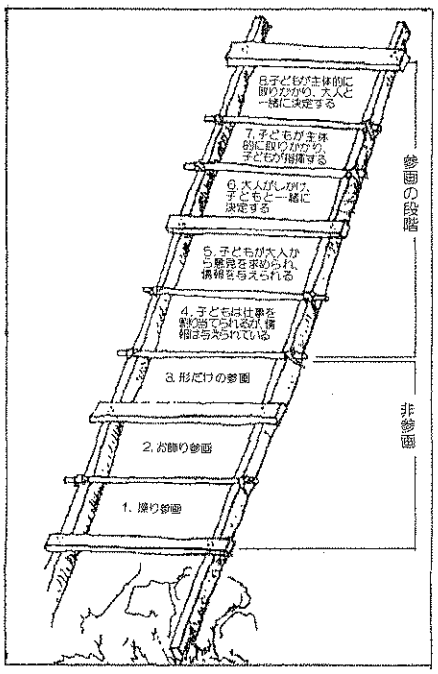


図１　子どもの参画のはしご（『子どもの参画』ロジャー・ハート著，IPA日本支部訳、萌文社発行より）

奥田陸子さんを中心にＩＰＡで翻訳して、出版社の萌文社の協力も得て、『子どもの参

画』（発行：萌文社）をまとめることができました。タイトルの「PARTICIPATION」は普通「参加」と訳されますが、奥田さんが「参画」ということを強力に主張されたのです。「参加と参画を混同するのではないか」という議論になり、「参画」はいつごろから使われてきたのかという話になったのです。「男女共同参画」ということで、北九州の反公害に立ち上がった女性たちの運動で使われてきた、そして、その元には川喜田二郎のＫＪ法が関係しそうなこともわかりました。「参画」には、弱い立場からの主体的な運動というような意味が込められていると思います。川喜田さんは、学園紛争時代に、大学が教育の機能も社会的な意義も失ったということで、大学を辞めて、移動大学、青空大学を展開して、各地でフィールドワークしながら考えていくという「ＫＪ法」という方向性を示しました。我々もワークショップでＫＪ法を使いますが、彼が考えていたのは「参加」ではなくて「参画」で、自分らが自ら関わっていくという強い意味が込められていたわけです。

「子どもの参画のはしご」の上段に「子ども主導で大人と決定」というのがありますが、最初は、いろいろな複雑な問題に子どもが意思決定をして大人と分かち合うなどということができるのかと思いました。しかし、南米やフィリピンなどのかなり難しい状況の環境の中で、子どもたちが主体的に動き出して、大人たちをも変えるような動きをしている例がいくつも本の中で報告されています。「子どもが変わって大人も変わる」ということが、世界では起こっているわけです。そこで、今日は日本での事例を考えてみたいと思っています。

この「参画のはしご」の議論をするときには、年齢の問題が出てきます。小さい幼児でもできるのか、高校生や中学生ぐらいなら、小学生ではどうか、というような問題です。ロジャー・ハートは「何年生にはこういうことをしなさい」というようなことは言っていません。心理学者による発達の段階特性というようなものは紹介していますが、ロジャー・ハートは「いろいろな年齢や能力が混ざっているほうがいい」と言っています。ガキ大将集団などはまさにそうなのですが、子どもたちはギブ・アンド・テイクということから学んでいくのです。

また、「子どもには限定した、子どもにできることだけを与えて、複雑なものは避けたほうがいいのではないか」という議論に対して、ロジャー・ハートは、「細部の検討については妥協や原案の縮小が付き物だから、子どもに関わらせないほうがいいという意見もあるが、これは誤りである。子どもたちには、議論の場で意見が出せなくても、なぜ、どのように妥協がなされるかを理解できるようにするべきである」ということを言っています。実際に子どもたちがまちの問題に取り組んだときに、いろいろな解決できない問題に直面します。それにどう対処していったらいいか。その辺も考えてみたいと思います。

■子どもの意識付けとは

それでは「なぜ子どもの参画なのか」ということです。「子どもの参画のはしご」でいちばん高いと思った事例は、もう20年前ぐらいですが、太子堂での活動での話です。私らが「子どもの遊びと街研究会」というのをやっていたら、三世代のヒアリングをしていた子どもらがどんどん遊びに来て、児童館みたいになってしまったのです。そんな中で「キツネの恩返し」の民話を高校生が紙芝居にしていたら、子どもらが自ら芝居をつくり、シナリオを書いて練習し「キツネ祭り」という太子堂のお祭りで、路上で自分たちが演ずるというところまでやってしまったのです。これなどはすごいレベルにいったものではないかと思います。子どもらがどう意識付いていったかというようなところまでは、このときは考えていなかったので、検証していません。

実は、太子堂の中でも圧倒的に多くの住民は無関心でした。どのようにまちづくりに意識を持ってもらうかは、大人も子どもも同じだと思うのです。子どもは、体験の中で積み重ねて、だんだんやる意欲を持ってくるのです。言語学者のチョムスキーの理論（図２）を持ってくるなら、みんな深層構造から意識へ持ってくる仕組みを持っていて、子どもが自ら文法などを習得していくことから、体験と言葉とをつなげる「パラメーター変換」が認識化というものにつながるというのです。そのためにも意識というのは大事であり、言葉との関係を考えていかなければいけない。その辺は教育の世界とも一緒にやっていく共同作業だと思うのです。言葉と体験の関係は、柳田国男の教科書などにも出ています。それから「つづり方教室」の国分一太郎などは、体験と言葉の関係という意識を持っていました。総合的学習などでは、そういうことがいろいろ展開されているわけです。

現在の教科書は対照的です。同じ２年生の教科書でも、私は見てびっくりしました。柳田の教科書とはえらく違っています。いっぱい情報があり、知識は増えていくが、体験とどう結び付け、何をやっていくかということを判断するのは難しいと思うのです。柳田は、地域の中で組み立てていきました。子どもたちと一緒に、地域の中で

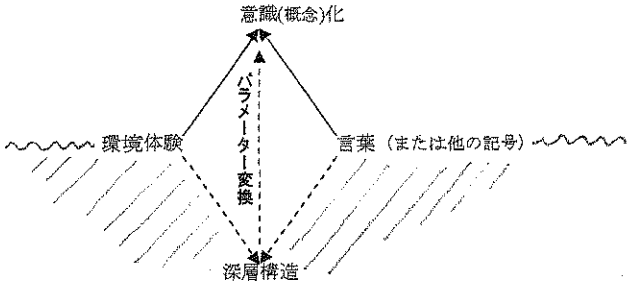


図２　チョムスキー理論による意識化のモデル（作図：木下）

問題なり材料を持って考えていき、こういう絵地図づくりなども、子どもと相談するという方向で持っていっています。そういうあり方をもう一度考えてみる必要があると思うのです。現在は、「子どもへの励ましの言葉かけ」まで考えなければならないようになっている。これはどういうふうに考えたらいいのだろう、と思うのです。

■子どもから大人を変える

愛知県額田郡の大雨河小学校でやられている総合的学習では、まさに地域の材料で、柳田理論と同じような展開でやっています。「私たちの地域はどういうふうになっているのか。どこから来て、どこに行くのだろう」というようなことを考えています。ここは農村部で、林業の衰退でいろいろな課題を抱えています。前にお話したかと思いますが、「もう林業は駄目だ」と嘆くおじいさんに、子どもらが「何でそんな嫌なのに林業をやってるの」という問いかけをして、おじいさんたちも開き直って「好きだからやっている」と子どもに答えたということがありました。このように子どもから大人を変えていくという可能性が、こういう活動の中にあるのではないかということを2つの事例を交えながら議論していきたいと思っています。それではまず寺本先生にお願いいたします。

〈講演1〉

まちの素材を生かして子どもも大人も輝く学び合い ー西尾における学校と地域の MATCHing ー

寺本 潔（愛知教育大学教育学部助教授）

■子どもを取り巻く地域社会の変貌

まさか木下先生から柳田社会科の教科書の図が出るとは思いもせず、非常に驚きました。私も逆に都市計画や建築の勉強をよくしますが、こういうふうに学問間の交流があると、非常にうれしく思います。最近の教科書を見て、木下先生も愕然とされたということですが、そのとおりなのです。柳田社会科のあったような戦後の貧しい時代は、貧しいからこそ子どもたちが一生懸命家を手伝ったり、大人の仕事を手伝ったりして、非常に社会と結びついていました。そもそも子どもは、内発的な参加・参画のエネルギーを持っているのですが、今はそれさえも起こってこないのですから、子どもの励まし方とか体験そのものを用意してあげないと始まらないという時代になっているのです。そういう面で、かなり時代が違ってきていて、子どもの姿も違ってきていると思います。

私自身も学生時代に、木下さんが20年前にやっておられた三世代の子どもの遊び場調査で、太子堂の子どもたちの動きに注目していました。私にとってはバイブルの一つでした。でも、いまだにあれがバイブルというところが悲しいですね。どんどん新しいのが起こってくるべきですが、なかなか乗り越えられない非常に難しい問題が横たわっていると思います。

■まち学習・まちづくりを学校で

さて、日本の教育史上初めて「総合的な学習の時間」が出きました。制度的にきちんとした形で、週3時間、年間100時間ぐらい各学年に設けられました。これは、各学校で何をやるかを決めるのです。ほとんどの学校では、英会話、パソコン実習、お年寄りを招いての福祉の学習などはやりやすく、まちづくりは入れたくても入れられない、というのが現状かもしれません。ロジャー・ハートの「参加・参画のはしご」をだんだん上らせるようなプログラムを実際に用意しようと思うと、かなりしんどいと思います。ですから、ちょっと引いてしまうのではないかと思うのです。

でも、私自身これではいけないと思って、6年前から愛知県の人口10万人の城下町にある、商店街の空洞化も激しいまちの西尾市立西尾小学校というところで、まちづくり資質を育成することを最終的なテーマとしてやってきました。木下先生とか延藤先生の先進的な事例に学びながら、何とか学校教育の中にそれを入れられないかと思って、孤軍奮闘してきたのです。なぜそういうことをする必要があるかというと、やはり学校が子どもを握っているのです。特に平日は握っていますよね。学校の平日の時間、正規のカリキュラムの中に、まちづくりをテーマにした学習活動を入れることができれば、まさに持続可能なカリキュラムとして、その学校の特色としてやっていけますから、一発花火みたいなイベントではなくなる。そう思ってやってきたのです。

しかし、当初は非常に大きな障害がたくさんありました。まず教職員から「なぜそんなことをやらなきゃいけないの。やって何になるの」という疑問が沸き上がってきました。そこで、たくさんの事例、特にこの世田谷の事例などを先生方にお見せしながら何とか進んできた、というのが実態です。お蔭さまで、たくさんの単元を立案し、素晴らしい冊子や本を出すことができました。そして、3年前からは、2月に公開の全国研究発表大会を開いていまして、2,000人以上の先生方が全国から来ていただけるようになりました。来年の2月1日にも、西尾小学校で全国研究発表大会「総合的学習フォーラム」を開催します。おそらく最高レベルの報告ができると思います。文化会館を全部貸し切って、大変なスケールでお見せすることができると思います。

■4つのステップの提示「愛着、共感、参加、提案」

西尾小学校は、全児童数750人、1学年4クラスなどというところもあり、クラスも35人ぐらいと非常に大きいです。さっき出ました愛知県の大雨河小学校は非常に小さな学校ですので、まちの中で伸び伸びした素晴らしい教育をしているのですが、西尾小学校は、ごく普通の都市部の公立小学校です。そこで、展開するには、やはりある程度システマティックにならないとできないのです。カリキュラムの大筋は、低学年は「環境への愛着を深める」、中学年は「いろいろな環境からの痛みや喜びを分かち合う共感という資質を育てる」、5年生は「環境改善への参加」、6年生は「あるまちづくり提案ができる」ということです。この「愛着、共感、参加、提案」という4ステップの階段を、私は先生方に提示しました。

先生方はそういうものをある程度提示しないと、納得してくれないのです。すぐに「それをやってどうするの。いま3年生の担任だけど、どの辺までやればいいの」という発想でこられる。そして、まちの中に出て、人と触れ合って、いろいろなまちの良さを調べたり、公園や町並みの改善プランを出すといったプロセスの中で、総合的学習を通して、いろいろな教科の力を実際に身に付けるようなプログラムも中に入れていかなければいけません。単なるイベントでは、乗ってきません。ちゃんと学力になるということを明示しないと駄目なのです。プランナーの方々は、「なぜ学校は私たちと接点を設けようとしないのだろうか。売り込んでいって何も言ってくれない」と思われるかもしれませんが、それはそうです。売込み方を勉強しないと、売り込めないと思います。私は、いつもプランナーの方々に、「学習指導要領を読んだことがありますか」と聞くのですが、ほとんどの方が読んでいないのです。何年生がどれぐらいの資質で、どの教科でどんなことをやっているかが頭に入っていて、「4年生の2学期に何々の学習と絡んだら、できるのではないでしょうか」と提案すれば、先生方は、「ああ、なるほど」と思われると思うのです。こちら側も勉強していけば、学校とリンクすることは十分できると思います。

■子どもの生きる力を育むには

実は、私は2日前にニューヨークから帰ったばかりです。同時多発テロ後、そこは大変ナーバスな状況に陥っています。外を歩くのが非常に怖いです。ニューヨークには、『子どもの参画』（発行：萌文社）の著者、ロジャー・ハート先生に会いに行ったのです。ロジャー・ハート先生は、私と同じ地理学の出身で、私自身も同じような仕事をしたいなと思って会ってきたのです。ニューヨークでお会いしたときに、「非常に怖い」とおっしゃっていまして、エンパイアステートビルの真ん前に大学があるものですから、「次に狙われるのはエンパイアステートビルじゃないか」とおっしゃっていました。

こういった危険な世の中では、子どもたちがまちに出て遊ぶとか活動するということが、止められそうな感じです。大阪の附属池田小学校のような痛ましい事件があると、学校の校内でさえも危険な状況だと感じられます。何だか、私たちが考えているまち学習とは違う方向に行ってしまうような気がするのです。子どもたちをまちに出さない、実社会に触れさせないほうが安全なのです。囲って、安全な部屋の中でパソコンや英会話をやったほうが、システマティックに、その方面の能力は形成されるでしょう。しかし、それで本当の人間形成はできるでしょうか。本当にそれで豊かな資質を持った市民になれるでしょうか。

9歳、10歳ぐらいに、子どもたちの原風景、故郷意識は明確に形づくられます。思い出してください。小学生の思い出というのは、そのころの思い出だと思います。人とかかわり、自然とかかわり、場所とかかわるということが、人間発達、人格形成の上で非常に大事なのだということは、皆さんも薄々感じられていると思います。でも、そういったプログラムを、今の学校教育は持ってこなかったのです。だから、「総合的な学習」という、いろいろな総合知を養い、実践的に自ら考え、自ら問題を解決していくということで、テーマは何でもよく、地域素材なども使いながら、リアルな体験を積んで、子どもの生きる力を育みましょう、ということが出てきたのです。しかしこれを安易な方向でやると、決まり切った英会話やパソコン操作とかになります。はっきり言って、それをやっていたほうが楽です。しかしそれでは、やはり子どもは育たないように私は思います。

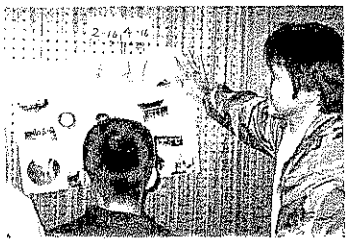
■子どもは小さなまちづくり人

まち学習、まちづくり学習というのは、これからの市民をつくっていく上でも非常に大事です。いつも私は、自治体の職員や先生方に、「世田谷の動きを調べてください。素晴らしいですよ」と言っています。全国でもトップレベルの住民参加のまちづくりが行われている世田谷でやってこられた、まちづくりの動き、その中で育っている市民、これを学校教育でも育てるべきなのです。私は、狭い都市計画教育とか社会科教育ということを申し上げているのではありません。まさに市民づくりなのです。子どもは小さな「まちづくり人」です。是非そういった人を、こういった学習機会を捉えてつくっていただければと思っています。専門家は、そのようなまちづくり学習にどのようにかかわっていけるのか、ということをアドバイスする時代に差し掛かってきているのと思います。それでは、最後の話はスライドを見ながら展開したいと思います。

■まち探検で、まちが大好きに

子どもは、外に出て取材をやらせると喜ぶのです。教室の中や校内で学習するのは嫌なのです。特に、カメラなどを持たせると喜んで取材します。例えば「おしゃれな人、場所、物、生き物などを探してごらん」と言ってやらせると、すてきなポスターを作ります。「ここは、すてきなコーヒーカップが選べるから、すてきな場所だ」ということで作っています。3年生の作品なのですが、楽しくまち探検をやっていくと、まちを大好きになり、まちに出かけていくことが大好きになってきます。

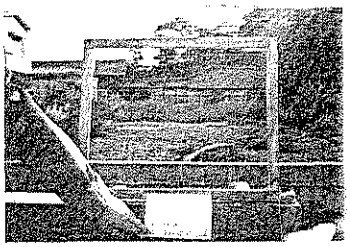
今日お話する西尾市は、旧城下町できれいな町並みがある場所もあります。ここだけは市が景観修景をやっているので、きれいなのですが、あとは空洞化で、少し汚れています。親子でまちを歩き、ステキな景観を写真に撮り、親子でポスターをつくるという行事をやっています（スライド1，2）。こういったイベントを、学校行事の一環として、3年間連続でやりました。750人の児童生徒と親ですから、1,500名が学区内を歩き回るのです。これは、大きなインパクトを地域にもたらしました。「大勢の人を見て、一体、何なんだ！」「今日は一体どういう日？」というわけです。最近は、自分の子どもが通っている小学校の近所を親も歩いたことがないのです。子どもも、通学路以外には外れません。道草をしないで、学校が終わったら、シャトル便のように帰ってくるのです。親も「こんな場所があるなんて知らなかった」と言います。今は恐るべき時代になっているのです。ですから、コミュニティとか地域の中でのすてきな風景など、発見できるわけがないのです。



■発見！新たなまちの顔

● スライド3

これは世田谷でやられたことを真似したものです。手製の額縁だけを持っていって、すてきなアングルを切り取ってくるというものです。「子ども街角美術展覧会」や「古い明治の家」というタイトルが書かれています。これは6年生の図工+総合の授業でやらせたのですが、自分のお気に入りの風景の所に額縁を設置してくるという授業です。何のために設置するかというと、まち行く人は、「何だ、これは」とフレームが一つのギャラリーとして見るわけです。子どもたちも、何気なく見ていたまちの中の風景を、「なかなかおしゃれじゃない」とか「すてきな所もある」と思うようになるのです。風景、景観を切り取ってくる作業をすることで「概念化」が果たせると思うのです。



もう一つは、倉に着目させた実践を展開しました。商店街に出かけていって、「お宅は倉がありますか」と聞くのです。実は、教育委員会も、自分の市に何棟倉が残っているかを把握していませんでした。学校の授業でやったら、45棟もの倉が中心街に残っていることがわかりました。ここは倉の町としては別に有名な所でも何でもないのですが、「あるよ」と言われるとお願いして倉を見せてもらいました。倉というのは、鬼瓦とか、厚い窓とか、ちょっと違いますよね。そうすると、「なぜ、こういうふうな色や壁なんだろう」ということで、建築デザイン学習が展開されるわけです。これについては、共立女子大学の稲葉先生が紹介された、アメリカのアン・テーラーの「建築と子どもたち」のプログラムを生かして、学ばせてみました。こういった建築物というものも、非常に総合性の高いテーマですから、まちづくり学習には持ってこいです。中を見せてくれるかどうかも、交渉術なわけです。ガラクタを置いてありますから、普通は倉の中など見せたくないのですが、西尾小学校はまち学習をやっているということが有名になってくると、信頼関係ができて、「いいですよ」と見せてくれるようになります。

■地域の人と出会い、触れ合い、関わり合う

2年生の女の子が、民話を取材して、少しオリジナリティを入れて、紙芝居で発表しました。民話を教えてくれた地域のおじさんに、「こんな民話の紙芝居を作ったよ」と発表しているのです。地域の方との接点になるのです。このように、地域の方に教えてもらったら、地域の方を呼んでフィードバックしていくことが大事になってきます。そうやって信頼関係ができてくるのです。

子どもたちは、自分の調べた民話を、絵コンテ入りの民話絵本に作ります。これが、教育学でいうポートフォリオというような、評価に使えるような作品にもなってきます。5年生、6年生ぐらいになると、かなり程度が高くなります。5年生で展開している「職人」です。うどんづくりの職人を調べた大きなポスターですが、中身も非常に程度が高く、普通の小学校には、これだけのポスターはありません。なぜかというと、世田谷で紹介された『参加のデザイン道具箱』の研修を私が受けて、ファシリテーション・グラフィックの手法を身に付けて、それを先生方に伝えたからです。そして先生方が子どもたちにその手法を教えたので、子どもたちの作品がしだいによくなったわけです。

その中で、早川さんの印鑑屋さんの実印をさっさと作っていく技術もすごいということで、こうやって発表しているわけです。このように、まちの中には気付かなかった人という財産が埋もれているのだ、すごい技を持っている人がいるのだということを知ることで、自分の故郷を見直していくわけです。表面的にやるのではなくて、人と関わり、人の技術に出会い、触れ合い、取材していくということをやっていくと、子どもたちはかなり環境との対話力が身に付いてきます。

● スライド4

最も高めるのが、6年生の2学期から3学期にかけての「まち改造計画」という単元です。皆さんが来年の2月1日に西尾小学校に来られたときに、6年生の授業を見られると、この「まち改造計画」の集大成が見られると思います。都市計画基礎教育のようなグレードにまで高めることができています。ちゃんとインタビューしたり、市役所の都市計画課に行ったり、市民や行政は何を考えているか、ということを聞いて、自分たちはどうしたいかということを考えて、提案するようにしています。かなり提案能力は高く、中身もいいです。発表しているこの女の子の表情も自信にあふれています。

■協働することで学びを大きく

● スライド5

今日は、小学校の先生や教育学者もいらしていると思いますので、評価はどうするのか、というお話をしたいと思います。これは、大きなウェビングです。A3の2倍ぐらいの共同ウェビングを開発したのです。これは、グループワークをやり、自分の追求テーマをほかの子どもたちに紹介し、アイデアをもらい合い、まちの人たちにも、自分の発想とか疑問などをグラフィックで書いたのを見せるというものです。ウェブというのは、クモの巣です。

例えば、ここには「まち点検」と書いてあります。まちの中にゴミが多い。カラスがゴミを散乱させる。なぜカラスが多いのか。カラスネットをつくったらカラスを追い出せるという「カラスバーイ」のクリーン作戦をどうしたらいいだろうか。このようなことを考えている女の子のウェビングで、大きくして、お友だち、まちの人、先生方に見せながら、アドバイスをもらう共同するウェビングです。そういう形で、学びをさらにスパイラルにやっていきました。

今は「自己教育力の時代だ」「自己学習力の時代だ」と言われていますが、学校の先生はそれを極端に捉えて、「一人調べしなさい」「一人で考えるのですよ」と早く手離す癖があり、すると手放された子どもは「何したらいいの」となり、全然考えが深まりません。学校という集団の場ですから、いろいろな関わりがいるのです。ですから、まちの人からもアイデアをいただきながら進めてきました。(スライド終了)

■まちづくり学習の大いなる可能性と期待

教育のやり方も工夫する必要がありますので、難しいとお考えになったかもしれませんが、実際に西尾小学校に来て授業を見たり、いろいろな本を読まれれば、皆さんにもできると思います。

最後に、過去3年ぐらいやってきて、いま中学校に上がっている男の子が回顧文を書いていますので、それを紹介したいと思います。

> 6年生の2学期、『まち改造』というテーマで総合的学習を始めた。初めのうちは進め方が全くわからず、なかなか行動することができなかった。それは、総合的学習をやるのが初めてだった上に、教科書などのマニュアルが全くなかったからだ。それでも、先生に手伝ってもらいながら何とか仕上げることができた。総合的学習は、学校で習うすべての教科＋αを上手に組み合わせて初めて完成するのだと思う。言うだけなら簡単だけど、かなりのやる気と根気が必要となる。これからの中学・高校生活の中で、総合的学習をやる機会はどんどん増えてくると思う。そのときこの経験をどう生かすかが、いちばんの課題だと思う。それは、経験したことにより進め方のコツをつかんでいて、次にやるときに少し有利になるが、逆に、総合的学習は楽なことではないと知っていることで、やる気が減少してしまうからだ。僕自身は、この貴重な経験を少しでもいいほうに生かしたいと思っている。僕たちが提案した「まち改造案」を、できる限り実現してほしい。また、ほかのいろいろなところで僕たちの案を活用して、日常のまちをどんどん良くしていってほしい。そのために、実現できるものから早めに取り組んでほしい。小学生の案だからと軽く扱わないでほしい。僕たちの提案した案は、まちの人の願いを集めて、代表として持っていったものばかりだから。

というような、回顧文が出ました。「やってきてよかったなぁ」と思いました。まさに子どもの参画能力をかなり高めることができた、ということを感じました。

全国から来られた参観者の方から、「うちの学校ではできません。西尾小だからできたのですね」という意見がでましたが、実は西尾小もできていなかったのです。5、6年前は、ほとんど何もなかったのです。まちづくり学習は非常に魅力的なテーマではありますが、やるとしたら本腰を入れないとできません。しかし、やっていけば、先ほどの子どものように、素晴らしい市民資質を持った子どもが育成できると私は信じています。この方面のテーマの学習、あるいは総合的学習は、大いなる可能性と期待を持って進めていくことができると思っています。

〈講演2〉

防災を手がかりに子どものまち意識を育てるには
ー「防災まちづくり学習」モデル校実践の現場からー

吉川 仁（(株) 防災&都市づくり計画室代表）

■大切なのは、人・もの・場所の関わり

防災というのは結構世の中では誤解されているような気がします。現実に学校では防災教育を行っているんですが、地震がきたら机の下にもぐりなさい、避難するときはこうやってというきまりを教えるだけになる傾向があり、子どもたちにはやや飽きられているような言葉が「防災」です。

しかし、どうも防災でいちばん大事なのは、人のつながりであったり、ひとと空間の問題であったのです。不燃化するだけとか道路を広げるとか地震に強い街づくりだけでは防災的ではないな、と思いながらやってきたわけです。

阪神大震災が起きて、よく言われるのは、従前から区画整理がされていて、きれいに整備された所では被害が少なかった、従前のまちづくりや地域活動をしていたところでは、復興とか地域の復旧や助け合いが進んだとされています。が、その一方で愕然としたのは、都市計画とか、自分たちのまちをつくるということ、共同して何かするという意識が、かなり欠けていた、行政の方や市民の方が、お互いの立場を思いながら、一つのまちをつくっていくという気持ちが全くなかった。そういうことに愕然としたということです。その状況を何とかするためには子どもの時から防災とかまちづくりに触れていたりする学習が大事ではないかと考えています。

■阪神・淡路大震災から次に展開するには

阪神・淡路大震災があって、防災がかなり大事だということが言われました。各地でいろんな取組みがあり、関西では田中先生（大阪教大）・室崎先生（神戸大）などの手で『中学生のための防災まちづくり読本』（平成11年11月建設省近畿地方建設局）が作成されています。学校現場でも、県や市の防災副読本も、「被災の体験があってこうだった」「自分たちの命を守るために大事なことはこうだよ」というものも出されています。

『中学生にための防災まちづくり読本』は、都市計画などについても知ってもらおうということで、非常に良くできています。中学生向けということもあって、かなり内容を高度にして、全国の中学校へDMを出し、希望された所へは生徒の数だけ送られて、各地で使われています。内容は、災害をどう見るかという話、まちをどう見るかという話、それからまちづくりとはどういうことかといった内容が入っています。

この『防災まちづくり読本』を使って、授業に生かしたという学校もございます。授業の中に取り入れ、まちを歩いたり、まちについて考えるということをしています。授業の一環に取り入れ、調べ学習やグループ学習、防災マップづくりに活用されていった例等があります。

ちなみに、足立区の花畑北中学校で実践された事例は、地域の問題を扱っている学習の一環で、この副読本を使って、阪神大震災のビデオを見てから自分たちの地域を見つめ、さらに以前に先輩たちが防災マップというものを作ったので、その経験を紹介するなどしています。防災マップを作るというのは、役所の防災課の資料を見ればつくりやすいのですが、もう少し発展させて、防災から見て地域の良い所・悪い所、といったようなこと、避難場所としての役割、さらにこれを自分たちでまちをつくるという方向へもっていったということです。
その一つのとりくみに新聞づくりがあって、「地域の防災を新聞に」ということで、ウォッチング結果や気になるガスタンクは大丈夫か、などヒアリングしていったことです。学校の中に井戸を掘って飲料水を確保しようといった動きもできてきていますから、子どもたちの教育としては、非常によくできていると思います。

ただ、やはり難しいなと思っているのは、防災なり災害というのは、非常にわかりやすいので、調べて、ここが危険でこれが問題ですねというところで止まっているあたりが、本質的にいつも引っ掛かっているところです。

それで、どうも読本や副教材だけの授業は、限界があるのではないかという気がしています。まちをこのように探検して、こういう観点で見ようというところまではいいのですが、それを自分の中へ取り込んで、自分のものや共同のものにして、次の展開につなげていくというあたりは、どうも学校の授業だけでいけるのだろうかという感じがあります。学校のほうにお任せしておくには、荷が重い話が非常にあるという気がしております。

■安全で安心なまちをつくっていく力を育てる

私の意識の中では、阪神・淡路大震災以前は、大人と子どもがまちに親しんでくれればいずれは防災にも発展するだろうくらいの意識もあったんです。そのうまくいった例は「杉並知る区ロード」です。ただ、阪神大震災後からはそうのんびりしているだけではなく、実際に次の時代、自分の周りの環境を変えるような力をもった子どもを育てなければいけないという意識が強まっていました。そこに、再開発コーディネーター協会という財団に、都市計画の恩師でもある高山英華先生を記念された基金があり、それを活用して「防災まちづくり学習」を考えようということになり、小澤先生（東京学芸大）や

木下先生（千葉大）、原さん（世田谷区）などによる委員会のもとで、平成９年度からこの防災まちづくり学習をどうやったらいいかというあたりについて取組みを始めました。

防災まちづくり学習とは何かというと、自分の命を守るとか、人の命を助けるといったような「防災教育」、これはこれで基本としているのですが、自分がかかわる住まいやまちや都市を安全で安心する、そういう市街地や地域社会をつくっていく力、できるだけ多くの他者と連携しながら実現できる力を育てる学習と考えています。これは、さきほど寺本先生がおっしゃった「まちづくり人」をということと共通すると思います。まだこの辺は仮説ですが目標だけは高くしておこうと思っております。

■水を手がかりとした方法論の開発

平成９年度の基礎調査を実施して現状と課題を整理し、平成10年度から志村優子さんも作業班に加わって方法論開発を始めました。行政職員、学校関係、専門家、まちづくりをしている地域住民の方によびかけてワークショップを行い、災害をイメージする想像力をもってもらうなど、従来の防災学習とは違った教育のプログラムを考えていただきました。それは、例えば水を手がかりに、環境の問題や自分たちの命の問題を学習するなど平成10年度レポートに入っています。

平成11、12年度から、学校現場での防災まちづくり学習の実践支援にとりくみはじめました。一応細々とした試みとして１都３県に各学校へＤＭビラ（資料１）を配布し防災まちづくり学習をしませんかというよびかけをしました。それに対して問い合わせが10校ほどあり、その中の５、６校へ伺って、最初に打合わせをさせていただきました。それで、学校側から依頼があればこういったプログラムとかは考えられませんか、と言われた場合は、その学校に応じたものを考案して、また打合わせに伺いました。ただ、そのプログラムを学校のほうへお願いしますということで提供したのではなくて、いろんな事例を基に、担任の先生などに自分たちなりの学習のプログラムを作っていただいたということが原則です。ですから、進め方は学校で基本的に設定していただきました。

資料１ モデル実践校募集ビラ

その学習に対して、多少の費用を支援したり、資料などを案内したり、地域や役所への呼びかけを私どもが裏方として手伝ったということです。それらから実践していただいて結果を報告書にまとめました。

■各学校のそれぞれの試み

平成11、12年度に支援を行ったのは、まず杉並第六小、そして次にこの三軒茶屋の近くの三宿小、太子堂小、太子堂中でした。世田谷区の場合は、防災まちづくりに熱心ですし、委員に原都市環境部長もいらして是非モデル学習をやりたいというようなことがありました。そして、各学校へお知らせしていただいたところ日頃から地域との関係づくりを励んでいた学校でやりましょうとなりました。

さらに、墨田区立堤小学校は白鬚東防災拠点の中の学校です。文京区立本郷台中は、先に先生が始めていた途中から支援するというような形になりました。堤小は白髭防災団地という中でのたんけん活動です。１、２年生の生活科では、まち探検・公園探検をするのですが、この堤小は、白鬚防災団地の中に入っていて、子どもたちは全員その団地に住んでいます。「屋上にすごいタンクみたいな真っ黄色のものがあって、立入禁止になっているが、あれは何だろう」「地下からゴーゴーと音がするけれども、何だろう」といったようなことが、子どもたちにとっては不思議で、学校の先生も知らないということがあって、今年のまち探検は日頃行けない所へ行きたいということから、取り組んでいただきました。

杉並第六小は「私たちのまち?阿佐ヶ谷　みんなでつくる七夕祭り」をやりました。区役所から防災のまちづくりをしたいので学校との連携を図りたいという話に校長先生に応じていただきました。市街地の環境整備とかもあるかと思っていたのですが、学校の先生方がお話の中で、３、４年生が地域とのイベントに参加するような形でやれないか、ということで「七夕祭り」の話が出ました。七夕と防災がどう結びつくのですかという話があったときに、地域とのつながりができて、学校と地域がこれからも良い関係ができるようであれば、災害時とか防災にも役に立ちますから、やってください、という話にしました。

太子堂小学校は、地域との交流が非常によい所で、サバイバルキャンプを地域と学校で行ったり、区役所との仕切りも非常に低く協力関係ができていました。夏休みのあと、ちょうど三宅島の噴火等があったので新聞を読み込んだり、阪神大震災やその他の災害ということはどういうことなのかを調べたりしながら、自分たちのまちのことに目を向けて、自分たちで調べ学習を進めていきました。

三宿小学校は、区役所のほうからいろんな情報や資料を提供していただいて、震災というものを勉強し、それを自分たちのまちでどうだと考えたり、インターネット等を通じた調べ学習やまちを歩くなどして、最終的に区役所で子どもたちの発表会を行いました。また、世田谷区では、火災の延焼シミュレーションのようなものもあ

るので、それを子どもたちにやってもらっています。

本郷台中は、先生が今年は防災をやってみようということで、選択社会で取り扱いました。まず、最初に阪神大震災の学習等から入って、行政に伺ったり、それから身近な非常食といったようなことから活動を始めて、最後は町内会の方々をお呼びして「私たちが考えたこと」などが報告されました。かなり手探りだったのですが、それなりの意味のある活動がされたということです。

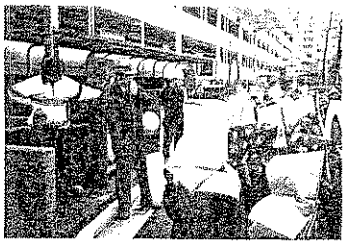
■問題をみんなで乗り越えて

太子堂中学校の例は、本日のテーマの参考になると思います。太子堂地区は防災まちづくりということで20年以上の実績があり、その一つで広場づくりの実績があります。どのような学習をしようかと先生方とお話をしていたら、まちづくり広場の予定地が太子堂中学校のそばにあって、あれを何とか使えないかというような話がありました。前年に、世田谷区の街づくり課でも中学生と地域の方々とが一緒になったワークショップで計画づくりをして整備をしたいというような話が、学校にもちかけられていたんですが、学校としては、時間的に一緒の作業はスケジュール的に難しいということがありました。で、その方針を変えて、中学生に計画づくりをお願いできないだろうかということで始まりました。中学生たちは、先生と相談しながら、生徒会としてアイデアや計画づくりをしようという話になったのですが、最初から広場の周辺の方々と、うまいコミュニケーションがとれませんでした。

1回目に、中学生に公園の計画づくりをさせてよろしいでしょうか、という話し合いを行ったのですが、地元から出る意見は「広場にするのは困る、たまり場になる」「近くにはプールがあったりするので、塀が鍵付きじゃないと困る」など反対がでたり、出席した中学生を不快にさせるような発言も出ました。しかし、そういうことをしながら、中学生たちが計画づくりを進めていきました。

これらの事例を、特に時間の範囲で太子堂中学校の実践を中心に、ＯＨＰでお話したいと思います。

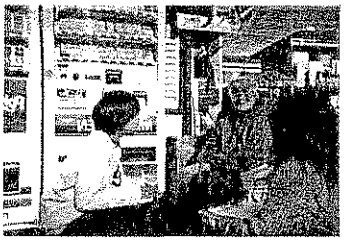
■実感のこもった体験学習を



●OHP1　墨田区堤小は、高層住棟の中がすべて学区なのです。ですから、子どもたちは何で自分の所にこういう団地があるのだろうということを学習してほしかったというのが、先生方の意向です。

●OHP2　杉並六小の例です。これは七夕のかざりつけですが、その場その場でみんな生き生きと取り組んでいます。ここに到るまでに、地域の方を呼んで七夕とはどういうことかとかどう飾るかなど学んで、学校内部でコンクールやコンペをして、自分たちで展開していました。

●OHP3　太子堂小学校では、子どもたちは、まちへ出てお話を聞いたり、防災ということで応急手当てを保健室の先生を中心に習ったり、調べてきたことをまとめて、最終的にグループの発表にしました。それから個人でまとめを、これは新聞づくりという形をとっています。いろんなことがそれなりに考察し、それなりに「みんなキラッと光る大事なもの」が表現されています。



●OHP4　三宿小学校でＫＪ法を使って自分たちで問題をグルーピングしているところです。その後、それぞれが自分たちの課題に調べ学習に取り組みます。特に火災のことを調べたいという子どももいて、世田谷区都市計画課がもっている火災の延焼シミュレーションを、実際に操作して勉強というか遊んでみて、これはけっこううけていました。

■試行錯誤を繰り返した広場の計画づくり

それでは太子堂中学校の事例についてお話します。

●OHP5　これがいまの世田谷区の三宿、太子堂のまちづくり実績の地図です。太子堂２丁目に中学校があって、西側にまちづくり用地として区が確保した土地があります。区と学校と私どもが伺って、事前にまちづくり学習の題材に、この学校のそばのこの広場をやれないかという話があって進め方を街づくり課と相談しました。で、平成12年６月に説明会をもったわけですが、でいろいろ地元からひろばにすることそのものについて特にたまり場になって不穏になるということで強い反対がありました。結果、「基本的に太子堂中学校の生徒が中心になって検討していきましょう、ただ、夜間の管理について心配がありますということも受け止めて検討します」ということになりました。それで近隣には途中経過を知らせるニュースをつくり、案ができたら説明しますという約束もしました。

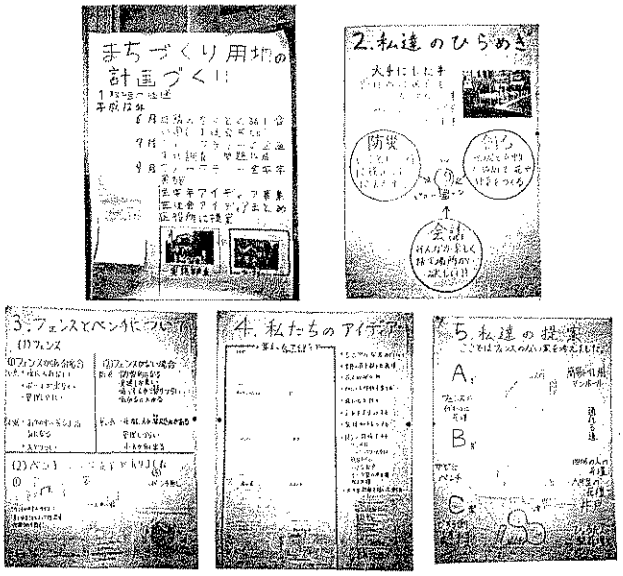
中学生たちは、まちづくり広場のウォークラリーを開

催しました。彼らは、全校生徒の問題として捉えるようにするため、ウォークラリーをしながら「ここは黒松広場と呼ばれていますが、どういうものですか」というようなことを問題提起して、広場のアイデアを募りました。

●OHP6　それを基に、みんなで集まり夜遅くまで、自分たちで発表の資料を作って発表会に臨みました。

まとめ方は「君たちが話を聞くとしたら、どういうふうにしたら結論がわかりやすいか、を考えて作ってよ」という指示だけして、私どもは見ていたのですが、ギクシャクしながらもさすが中学3年生で、かなりいろいろ話合いながら考えていきました。計画づくりのプロセスでは、一人一人が説明したのです。

●OHP7　「私たちはこういうことを大事にしよう」「自分たちで花壇づくりをやろう」という話とか中学生たちの居場所が全然ないという話も出ました。また、地域から指摘されたフェンスとベンチについては、付ける案、付けない案、ベンチの形などいろいろ考え出されました。さまざまな個別アイデアを寄せられたものもまとめて、最終的にはA、B、C案をつくりました。これは基本的には「学校と地域で育てる花壇を中心に、どう配置するか」「それから防災的に水とかトイレの工夫をどうするか」といったあたりが中心で、説明会に臨みました。



■防災は、否応なく人とまちとが関わるもの

子どもたちの説明は、非常に良くできていたのですが、その後いろいろな問題が出てきて、話し合っているうちに、フェンスをなくす話から、実は問題だったのは近くの公開空地で夜中に騒いでいることで、その問題に対策がとられていないということに近隣の方が不満だったことがわかりました。その問題の解決が先という意見が強く、中学校の横の広場整備は結局流れてしまいました。

途中では、一般の住民が、中学生は不良ばかりだという話して、彼らは歯を食いしばりながら聞き、帰ってきて「そういうことを言う大人は何だ」みたいに言っているので、中学生もしっかりしているなと思いましたが、ある意味では嫌な面、良く言えば現実を見せつけられました。結果としては、子どもたちの思いが実現できませんでした。

中学生たちは卒業したりしてしまうので、残された宿題は、先生方や生徒たちにお願いするだけでなく、それに巻き込まれた大人たちがどう継続していくかという問題があるかと思っています。

■そこには、人・時間・場所の問題が

防災についてやっていくと、かなりいろいろなことができます。寺本先生は、子どもたちがまちに関わることが大事というお話をされましたが、防災や災害は、否応なく自分がまちとか他人と面することになるので、そういう意味では、関わりをもつための1つのきっかけとしては優れているというか考えやすいと思います。

災害とか防災でまちづくり学習を進める上での課題を考えると、まず第1に人材の問題があげられます。先生にはまちとか災害とかを子どもたちに先がけて知りたい、理解したいという要求がどうしても強いのですが、これらは先生方が教えるには難しい。子どもたちと一緒にやったらいいんじゃないですかと言いたいところなのですが。で、私どものような専門家や地域の方、行政の方を呼んで教壇に立たせていただくんですが、子どもに話をするときに、専門用語を使ってしまったり、上から教えてしまう傾向があります。子どもたちと一緒に学び合うことを理解したうえで、係わらせていただくという姿勢や進め方を持っていなければなりません。

2番目は、時間の問題です。こういう学習をするのに時間の設計が非常に難しいのです。学習プログラムは、やはり長い年月をかけてある程度は定常化させていかなければいけないかもしれません。例えば学校現場では次の学年で何をやろうかということを4月直前に担任の先生が揃ってからでないとプログラムが組めないという実情があります。ですから、当然長期的に構えながらも、ドタバタやらなければいけないところがあり、時間の設計が難しいということがあります。

3つ目が、場所の問題です。まちの中の広場をつくり、それを毎年中学生たちがかかわっていってくれれば非常に良い学習になると思うのですが、なかなかそういうところはない。まちの防災点検とかまち歩きをしても上級生が指摘した同じ問題がまだ残っていますね、で終わってしまうとやはりまずいのです。かといって、学校の中

だと、学校だけで完結してしまう。そういう発展して学習できる場所や機会をまちの中にどう用意していくかというような問題があります。

それでは、太子堂中学校のその後の経過も含めて、地域の側から見て、その辺の方向性とか問題について、太子堂まちづくりを長年進めてこられた梅津さんに、報告していただきます。

まちづくりのとりくみの事例
ー太子堂地区の場合ー

梅津政之輔(太子堂2、3丁目地区まちづくり協議会)

■ハードだけでなく、ソフト面からも

太子堂2、3丁目がやっているまちづくりは、防災まちづくりということで、昭和55年からスタートしました。太子堂を歩くとわかるのですが、狭い道に家が密集しているので、震災が起きると、世田谷区内で最も危険な地域だという話から始まりました。

世田谷区から提示された防災まちづくりの課題は、建物の不燃化、狭い道路の整備、防災拠点等の広場づくりという3つの課題、いわばハードの課題を提示されたのですが、役所と議論していく過程で、私どもは、ハードだけでなく、ソフトの面からも、コミュニティづくりを通して防災性能を高めていくことも、課題として考えていくことで、現在まで続けているわけです。

また、広場づくりの話がありましたが、広場づくりを住民参加でやろうという第1号がトンボ広場で、その仕掛け人は木下さんです。彼はまだ大学院生で、私の所へ来てワークショップをやらせてくれと言ってきたわけですが、それが何か聞いてもよくわからない。それで、木下さんはワークショップという言葉を使わないで、実質的にワークショップをやったわけです。それが太子堂での、住民参加にワークショップを使った最初です。そういうやり方を学んで、私どもは現在もいろいろ参加型のまちづくりに生かしているのが現状です。

それ以降、小さいポケットパークをつくるときには、すべてご近所の人に呼びかけて、住民参加で提案づくりをしてきたわけですが、太子堂中学校前にあるまちづくり用地、私どもは、「おもかべ邸跡地の公園づくり」と呼んでいるのですが、当然住民参加でやろうということにしました。ただ今回は、太子堂中学校と道路を隔てた反対側にあるので、初めて中学校にも呼びかけようということで、協議会と行政側が一致して、生徒会に働きかけたというのが経過です。

■反対、対立を力に変えて

第1回の説明会で、中学生に提案づくりをさせたいと言ったときに、すぐ近くの住民の方が出てきて、「太子堂中学校の生徒はタバコを吸う、もう不良のたまり場みたいになる」ということで、大変な勢いで反対したわけです。それで生徒会代表の1年生の女の子は泣き出したそうです。

実は私はこの説明会に出席できなかったのですが、後で協議会の報告を聞いて正直に言って、これはもう駄目だと思いました。しかし、その次の会議のときに生徒たちから、「生徒全体が不良だと思われるのは心外だ、自分たちで提案づくりをやろうじゃないか」という話が出てきて、先生たちもそういう動きの中で、「総合的な学習の時間」の一環として取り上げようということで、全校生徒が広場めぐりのラリーを実施したということです。

これも決してきれいごとでは語れないのですが、夏の暑い盛りに、中学生がグループ別に分かれて、たくさんある広場を回ったときです。子どもの中には、いたずらするのもいて、町会から「何であんな子どもたちを回すんだ、公衆トイレの上に乗っかって騒いでいるぞ」というような苦情まで出て、それが子どもなんだという事を認識していく以外ないと思いました。

そして、12月の寒い盛りに、提案がまとまり、子どもの代表に来てもらって発表してもらいました。しかし、協議会と町会と、ＰＴＡの方しか出てこなくて、近所の方は出てこなかったのです。それで、ＰＴＡの方からは、子どもを巻き込むようなことはやめてくれという厳しい批判まで出て、おもかべ邸跡地の公園づくりはできなくなりました。協議会では、せっかく子どもたちが提案したものが実現できなかったら、子どもの心に大変傷をつけてしまうのではないかということもあり、それとは別に、太子堂中学校から100メートルくらい離れている法務省の研修所が、筑波に引っ越すために空地になる、そこに公園をつくる話があったので、何とかそこに子どものアイデアを生かそうということで、協議会から行政に働きかけました。

■試行錯誤や変化を楽しむ

子どもの提案の中に、阪神大震災の経験からトイレにいちばん困ったという話があって、下水直結型の仮設トイレがつくれるマンホールを予め設置することが提案されていたのですが、これが平成15年度で予算化するということを、役所で決定してくれました。

それで、3年生が学校を卒業する前にそのことを知ってもらおうということで、校長先生を通して生徒会に報告してもらい、大変喜ばれました。いずれ実現すると思います。

法務省研修所跡地の公園づくりも住民参加でやって、いろいろ問題があったのですが、大人だけでなく、子どものワークショップで子どもの意見も取り入れるように提案して、いちばん近い多聞小学校と三宿小学校の生徒

に参加してもらいました。

正直言って残念ながら、提案された内容は、最初は既成の遊び道具しか出ていませんでした。それで私はもう1回やれないだろうかという話をしてやったのですが、そのときは大人と子どもが一緒になって議論してやりました。ただし、そのとき子どもの参加者よりも、大人の参加者のほうが多かったのが現状です。

ただ、私はこのように試行錯誤を繰り返しながら、いろんな形をこれからも見つけ出していきたいと思っています。

■まちとあからさまに関わることが大事

○木下　この太子堂中学校の問題は、議論するのにいいかなと思います。ロジャー・ハートも中に書いているのですが、いろんな複雑な問題などを、先ほど申し上げたように、子どもたちにあからさまに地域の中で考えてもらう。解決の方法はなくても、何が原因かを特定できなくても、問題を診断することはできるというようなことを述べています。そういう関わりは大事だと思うのですが、背景としては、この太子堂の中でも、中学生がタバコを吸っていても直接注意しないという関係になっているのです。大人が子どもを、子どもも大人を知らないという関係の中で、いろんな問題が起こっているのです。

そういう中で、子どもの参画をどう考えたらいいか。総合的な学習で地域を舞台にやるときに、いろんな複雑な問題まで出てくる。梅津さんが言われたが、結果が子どもの心に傷を負わせることになったらどうなのか。フォローする地域の受皿というものがないなら、どうするか。皆さんにも考えていただけたら、と思います。

吉川さんが問題にされた、時間の制約などの事情は先生方が詳しいと思います。その辺も含めて、後半の議論で、皆さんから質問をカードに書いていただき、前に貼っていただいて、ご意見をいただきたいと思います。

<全体討論>

子どもの主体的参画への課題

コーディネーター：
小澤紀美子（住教育委員会委員、東京学芸大学教授）
奈須　正裕（住教育委員会委員、立教大学文学部助教授）

ファシリテーショングラフィック：
町田万里子（住教育委員会委員、筑波大学附属小学校教諭）
細田　洋子（住教育委員会委員、建築と子供たちネットワーク仙台代表）

○小澤　いくつか質問が出ています。吉川さんが、人の問題、時間の問題、場所の問題という形で大きく3つにまとめてくださったのですが、それを具体的なご質問の中から対応していきたいと思います。

○木下　意見を紹介します。「現職教員です。私は、まち学習を意識して総合的な学習をやってきました。子どもが親を動かし、親が地域を動かすというダイナミックさも実感しています。子どもは乗るし、張り切るし、素晴らしい。しかし、問題もあるのです。まちづくり、まち改造などを始めるとどうしても利害関係が対立する場合が出てきます。防災に強いまちづくりのために自分の家はつぶされるという子や、その子と行政の担当者の子が同じクラスなんていうこともありました。子どもレベルでこのようなことをどう考えればよいのでしょうか」という利害の問題です。

■子どもレベルでの利害の問題

○増田（公立小学校教員）　こういうまち学習にあこがれて、やれないものかと失敗を続けている者ですが、やればやるほど、子どもが真剣に地域を見れば見るほど問題点というのは非常に複雑で、様々な人がいろいろなことを考えてその場に生きているのです。そうなると、防災のために道を広げると私の家がなくなる。どこかに行かなければならないという場面がたくさん出てくるのです。それを、大人の中では、相談などの手続を経て、意思決定するシステムもあると思うのですが、子どもレベルでどう考え、どうすればいいのでしょうか。

■まちづくりは、利害を前提として行うもの

○吉川　防災が契機で、ここは危険だから道路を通そう、「消防車が通らないと」「道路を通せば火災が止まるではないか」などの話が多分あるのでしょう。それが、スタートなのです。それが結論ではないのです。道路は防災のためだけに通すのかという話を1回戻して、造る側と造らない側、車に乗っている側と乗らない側の多様な意見があり、それで結論が出て、造るのなら、造らないのだったらと、いろいろなバリエーションがあって、そこからぐるっと回っていって最終的に、造る、造らないになるのだと思うのです。

だから、例えば、防災で道を造る、道を造ることによって人がいなくなる。これって本当に防災なの、と投げかけて戻していただければ、そこから道路は何のためにあるのだろうというほうへ発展すると思うのです。防災を切り札にされるのが20世紀だとしたら、21世紀は、そ

こからスタートしていくような展開の仕方があると思います。

道に対する思いが人によっていろいろ違うということが出て、これらの意見をまとめるにはどういう仕組みが必要だろう、深い藪に入りますが、そういう思いを子どもたちに、人の考えを合わせることが大事というところまでいければ、道路に対する説得性というのも出ると思うのです。

○木下　梅津さんがよく言う言葉で、まちづくりというのは、いろいろな考え方、価値観の人がいるということを知ることだ、という話をよくします。実際に、そういうところで意見の対立なんかで苦労されてきた方だから、非常に深い意味のある言葉だと思っているのですが、そういうことを子ども達も知ることに意味があるのではないかと思うのですが、その辺はどうですか。

○梅津　全くそのとおりだと思います。私自身も、最初は、まちづくりというのはこうあるべきだという自分の考え方を持っていたわけです。それ以外の意見に批判的な態度をとってきたのですが、20年関わってきて、まちづくりをやるということは、利害を前提として考えるべきだと気がつきました。まちにはいろいろな人が住んでいるのだから、何か1つのことを決めようとすれば様々な利害・対立が生じるのが当たり前なのです。それをきれいごとで、これが理想像だなんて描こうとすれば、それは現実的なまちづくりにはならないということが分かってきました。大事なのは、みんなの意見を出し合いながら、自分とは違った意見、違った利害があるのだということをまず認識しながら、それをどう乗り越えていくかということを、一人ひとりがどれだけ自覚するか、それがまちづくりを通して必要なことで、そのことを子どもたちにも知ってもらいたいのです。太子堂中学のケースは、非常に厳しい批判が出たからこそ、彼らは、そういう批判にも答えられるような提案づくりをしてくれたと思っております。

○小澤　妹尾さんに、そういう論争を含めながら、いろいろな価値の対立の中で子どもがどう学んでいったか、という高校生の実践を話していただきたいと思います。

■まちづくりは、結論を出すために学ぶのではない

○妹尾　高校で教員をしていて、今のようなことはすごく分かります。私が思うのは、学校でまちづくりを学ぶということは、結論を出すために学ぶのではないということを教師の側もしっかり持っていたほうがいいということです。いろいろな意見を受け入れる度量を育てることも1つあるのではないかと思うのです。様々な意見を出すのも練習だし、それを聞き取って、そういう意見もある。だから、私はさらにこう考える、とより深く考えるということにもつながるし、あせらないということがこの学習では不可欠だと思います。先ほどから、市民を育てるとか市民性を育てるという話が出ていますが、周りのことを考えながら自分の生き方をつくっていく、そういう大人を目指してもらいたい、ということが教師自身からアピールできて、そのために一緒に学び合っていく場をつくりたい。そんなふうに思って取り組んできました。

○小澤　高校の武藤先生から国語単元でのご質問です。「高校の教員です。国語単元学習で生と死をテーマに阪神大震災を取り上げましたが、文献学習では限界があると感じました。そこで、高校生が理論と実践の両面で作り上げるまちづくり学習についてアドバイスをしていただけると幸いです」とご質問があるのですが。

■高校生でまちづくり学習をしたいのだが

○武藤（春日丘中学・高等学校）　筑摩書房の教科書に被災者の体験の文章が載っていて、それを軸に様々な文献を重ね合わせて単元学習化してやったのですが、結局、実感まで届かないという思いが非常に強くあり、何とかそこを打開しないといけないという思いがありました。また、僕らの学校は、いつも8月に避難訓練をやるのですが、だんだん訓練が形骸化をしてきているというか、子ども達の間にそういう実感が感じられなくなり、一部の生徒は、何をやっているか分からなくて、校長が後で君たちは何だ、と批判するわけです。しかし、その批判はそっくりそのまま教師側に返ってくるわけで、その実感や体験をどうするかということで、行政担当者と話をするのですが、なかなか見えてこないのです。どこから入っていくのかということで、高校生の進路の問題があり、自分の進む道にさまざまな思いを持っていると思うので、そういうことにかんでいって入っていくのがいいのか、その辺りの迷いがあり、情報はたくさん集めて来年から入っていこうと思っているのですが、何か良いアドバイスがあれば、と思って質問しました。

○小澤　寺本先生に、小学校では、共感→参加→提案という形になっていますが、もし高校生ではどうでしょうか。

■実感を持たせることが大切

○寺本　最後に言われた職業を意識させるというのは非常に重要だと思います。職業人から社会を見ていくことにもなるので、その辺の入口というのは、高校生もかなり実感を持って切実に乗ってくるのではないでしょうか。また、大学進学を希望する子は、すぐには職業とは関係ないかもしれないのですが、大学を出た後の射程を考えたり、一市民としてどう考えるか、責任を持って防災をどう考えるか、何事も切実感を自覚させていく手だてをとられたほうがいいと思います。

国語科は非常に大事ですが、確かに実感から離れていく危険性があると思うので、実際のまちをいつも想起して、実際に歩くといった時間をとっていただかないと、本を読んだり話合いだけでは失速してしまうと思います。

■手がかりは現場に転がっている

○吉川　今は、中学生ぐらいでもまちとか自分の生活圏から離れてしまっているので、思考がかなり抽象的になっています。前にワークショップをしたとき、高校生向きの教材は何かないだろうかという話をしていたら、コーポラティブ住宅のような住まいの問題があったので、自分たちで高齢者になったつもりで一緒に住まいをつくるにはどうしたらいいのだろうか、というような話が出て、それを実際にやってみた、という例がありました。

学区がかなり広い所は、地域との関わりもなかなかとれないと思いますが、一緒に住むとか、そのための技術とか、福祉の問題や経済が低下した問題、ものづくりの分野でいえば、大工さんことなど、そういう辺りに手がかりがあるかなと思います。だから、職業教育の中でも防災はかなり活かせると思います。

実は、私の高校は信州の諏訪で、高校時代は地学の先生に地滑りの現場とかに連れていかれて、そこで考えさせられることがありましたが、そのように具体的な手がかりとなる、ハード、ソフト、医療の問題、ボランティアの問題、福祉の問題、経済の問題などは、現場にいろいろ転がっているので、子どもに応じて見つけられるかと思います。

○小澤　やはりフィールドに出ることによって子どもたちが大人に質問し、そこで能力を付けるというのがあると思います。いま小学校から中学、高校への継続性の問題があるのですが、プログラムの問題と、どういう資質を付けるのかという問題があります。

今回のフォーラムの表題として「総合的なまち学習の意味を問う」とあるのですが、そこで質問が2つあります。1つは、斎藤さんから「プログラムの連携が将来必要になると思うが、地域の中での小中学校の連携に課題はありますか」。それと、阿部さんから「高校においてまち学習、まちづくり、都市計画教育が実施されてないのはなぜでしょうか。小・中・高・大と一貫性を持たせることができればよいのですが」というご質問が出ています。

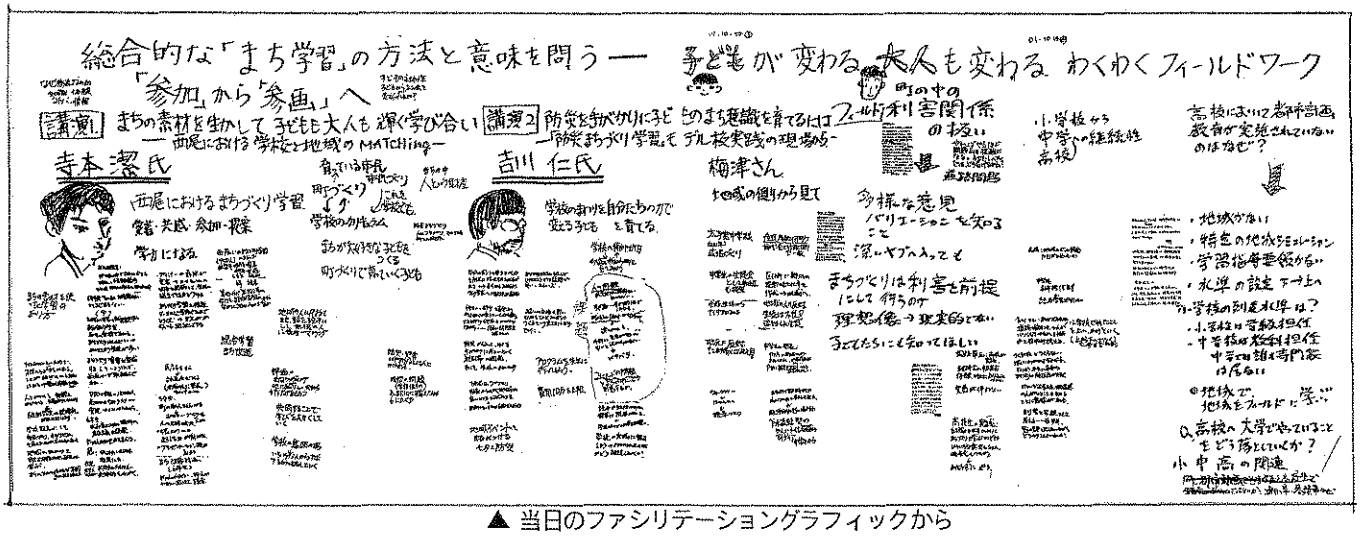
■高校におけるまちづくり学習とは

○阿部（洗足学園第一高校非常勤講師）　現在、都市計画教育を高等学校で実践するとどういうことになるのか、何が必要かということを研究テーマにしています。小・中学校に比べ、高校でまち学習やまちづくり教育の実践例が少ないことが明らかになりました。高校、特に私立高校の場合は、学区が広く、また、地域との連携や、対象とする地域をどこに絞り込むかということが、まち学習やまちづくり教育をする上で難しいところでもあると思うのですが、そういったことも踏まえて高校でやるならば、どういったことが可能かどうかをお話しいただければと思います。

■小学校と中学校の連携は

○斎藤（(財)世田谷区都市整備公社まちづくりセンター）世田谷区の小学校と中学校は、学区域がそれほど広くなく、小学校1年生から6年生まであるプログラムがあって、それぞれの学年でプログラムの連携を十分に話し合う機会はあると思うのですが、中学校とそういったプログラムについて先生同士が情報交換をしたり研究したりするようなのがあるのでしょうか。もし、あるのだったら私たちも地域資源の提供の仕方、アドバイスの仕方がきっとそれに沿った形でできるのではないかなと思ったので、学校のほうではどんなふうなことが課題になっているのか、とお聞きしたいと思いました。

○小澤　まず奈須さんに、なぜ高校ではまちづくり教



▲ 当日のファシリテーショングラフィックから

育が実施されてないのか、についてお話してもらいたいと思います。

■ある都市をシミュレーション的に考える

○奈須　私も小学校ばかりやっているので分からないのですが、地域がないというのは大きいと思いますし、小中学校が地域学校としてカリキュラムを組むということはすごく大事なことだと思います。しかし、逆にいえば、アイデアとしては、地域というのではなくて、特色のある特定の都市をシミュレーション的に考えてみるなどのアプローチをすることは可能なのだろうとは思うのです。むしろそういうのは大学の建築学科でやっているのかな、と思いながら、それを高校に下ろすというイメージがあるとは思うのですけれども、これはまた建築の人に聞きましょう。

中学校は、むしろ小学校を上げるというイメージですが、そうなったときに、同じことを繰り返してしまうということがあるのです。小学校でここまでやったことと同じことをやってしまう。下手するとかえってレベルが下がってしまうというのがあります。小学校の生活科が幼稚園より低いレベルをやっているというのがよく話題になるのですが、小学校では、どのぐらいの水準、どのぐらいの強度までやるつもりか、現にやってきたか、そのことがまた評価として現実の子どもの姿で位置づけられているということがあって、はじめて議論ができるのです。その場合、学習指導要領がないですから、結局それに当たるものを作っていくということになりますし、その水準までは小学校で責任を持ってやるので、中学校では、さらに何かをやってくれとなります。これは画一的ということではなくて、確かな力を付けるという意味で今後押さえていかなければいけない。これまでの教科というのは、上級学校から下級学校に向かって下ろしてきたのですけれども、今度は逆に下から上げていくという形だろうと思うのです。そうなると、小学校の到達水準はどのくらいになるのかな、ということを聞きたいのです。

■小学校と中学校は、システム上の違いがあるが

○寺本　下級学校から上級学校に上げていくという形が見られつつあります。西尾中学校の先生が、西尾小学校の授業の水準を見にこられます。なぜかというと、小学校でこれだけのグレードを持って、入学してきますから下げるわけにいかないのです。

小学校と中学校は、隠されたシステム上の違いがあります。それは、小学校は学級担任制で、中学校は教科担任制です。したがって、こういう総合的な地域を活かしたまちづくり学習は、中学校ではやりにくい側面があります。小学校は学級担任だから、あの子はこういう追究の仕方をする、こんなまちの体験があるなどと結構分かっているのです。だから、丸ごと抱えて学習を推進でき、次の時間は国語だが、総合をやりましょうというのが小学校は結構できるのです。

ところが、中学校はできません。非常に細かくなっていて、先生方同士がまさに教科セクトの中でがんじがらめなので、総合は非常に難しいのです。まちづくり学習を中学校でやろうとすると、専門家は誰もいませんし、実際に難しい。頑張っている先生もいるのですが、残念ながら中学校で非常に優れたまちづくり学習は展開しにくいだろうな、と思っております。展開できたとしたら、都市計画基礎教育のようなところまでいけばいいかな、と思いますし、ほかの場所でここと同じような問題はないのだろうかとか、私の村はどうなっているのだろうかとか、コミュニティの問題や他のいろいろな関わりの問題に視野を広げて学習することが、中学校では本当はできるはずなのですが、そこまでやった事例は残念ながら知りません。

高校は、大学から下ろしてくる方法はいいと思います。地域そのものを学ぶのではなくて、その地域を１つの素材として、トレーニングする場として学ぶ。改善していくときの１つのケースとして扱う。ちょうど大学の建築学科がどこかフィールドを決めてトレーニングするのと同じような形で展開できる可能性があるかな、ということを思っています。

○小澤　大学の話が出たので、現実にどう教えているのかを中川先生にお聞きしたいと思います。

■中・高校生の居場所が、まちに無い

○中川（早稲田大学）．　中学生の居場所の問題といいますか、たまり場所の問題が太子堂の所でも問題になったと聞いています。今、中高生の居場所というのがまちの中に果たしてあるのだろうか、というのが非常に大きな問題になっています。世田谷区の教育委員会のほうも、中高生の居場所の問題を取り上げ、空き店舗をどう使っていこうかという問題なんかもあります。自分たちのまちの中にどうあればいいのか、どう仕掛けていくのかという辺りが１つのポイントになるかと思います。それがすべてここでの学習の意味ではないかな、という気もしています。

それから、先ほど国語のところでどうするのかという話がありましたが、その場合でしたらば、相対するものをそれぞれ論理立てて比較をしなさいということがあると思います。例えば、都市の中でいうと、低層の戸建住宅の所と高層の住宅がありますが、これは防災のところに対しても相対する概念があります。いわゆる高層で、堅い建物で防災をする。そうではなくて、いわゆるコミュニティをつくって、低層でまちを守っていくということです。ある意味では相対するものを実際に見てもらい

ながら、自分はどういう支持をしていくのかということを文章としてまとめてもらうというのは、高校あたりであるのかなと思います。小・中学校でしたら、どう表現してもらうのか、というあたりが中心になりますが、高校あたりは、そういうようなものが書けていくのかな、と思っています。大学のほうもまちとのコラボレーションということで、中学生、高校生辺りにも入ってもらって1つのプロジェクトを作っていこうというところがありますが、そういう中で自分たちの居場所というのを高校生あたりにも考えてもらいたいというのがあります。

○小澤　中川先生は、早稲田で都市計画を教えておられるのですが、このような学習をやってどういう能力を付けていくのか、というお話がありました。

中学校の先生からの質問で、市民社会への参画と公民教育、というテーマで学習していて、参画の話は大変興味深く聴かせていただき、市民的資質について考えていますが、問題が、根づかない民主主義、行政頼り、知らんぷりの住民の3つあるのではないかということですが、もう少し具体的に伺ってみたいと思います。

■公民教育の視点がまちづくり学習には大事

○沼田（所沢中央中学）　まちづくり学習にとても興味があり、中学校であまり事例がないというお話がありましたが、まさにそのとおりで、私はその辺の研究をしていきたい、と思っています。中学校の教員なので、どう実践していくかということが大切で、公民教育の視点がまちづくり学習にはすごく大事だと思うのですが、何かアドバイスがあれば、お聞きしたいのですが。

■市民的資質を付けるために

○小澤　1970年代からのイギリスの環境学習をみていますと、クロスカリキュラムのテーマとして必ず出てくるのがシチズンシップ(citizenship)をどう付けるか、私は「市民力」という言葉を使っているのですが、そういうことがねらいとしてあります。1972年に出版された、まちウォッチングの元の『ストリートワーク』という本がありますが、その表紙には、旗をもって子どもたちが学校の外に出ているのです。自分たちで学校を破っていく、学びのやり方を変えていくというのがあります。その前提に1969年にスケフィントン・レポートが出て、そこで将、来大人になる子どもたちに義務教育のときに市民的資質を付けるのだと前提にいうことがあります。それが1989年の学習指導要領に投影されてクロスカリキュラムとして出され、今はまた環境教育と市民教育といろいろ統合されてきていますが、そういう流れの中にあって学びのあり方を変えていくのに20～30年はかかると考えております。そこで、そのような資質を付けるためにはどういう苦労を持っておられるかをお話していただけたら、と思います。

○柳澤（札幌教育センター）　私も中学校の教員をやってきて、小学校、中学校、高等学校の関連が大切だと考えています。発達段階の違いにより、学び方や学ぶ内容は異なってくるものと思われ、同じテーマでもそれぞれの段階で何をどのようにのばし、関連されていけばいいかと考えています。先ほどまちづくりの資質について、小学校までのがありましたので、中学校、高等学校ではどういった資質をつけることが望ましいとお考えなのか、お聞かせいただきたいのですが。

■社会の中で、自己の生き方を考えること

○奈須　寺本先生の西尾小学校の実践やその姿は小学校の多分ほぼ最高水準なので、そこから出発すればいいと思うのです。そこからお汲みいただいて、それを受けてやるぐらいの勢いで、今度実際に授業を組んで、そこで育つ力が実際どういう姿かということをやると、どういう形で続く可能性があるかということを実践的に確認できるのかな、と思います。

資質というのは何かということになったときに、話がちょっと戻るのですが、いろいろな利害や対立ということの中で差し迫った具体的なことをみんなで意思決定していくということを、まちづくりなどの場ではやります。これはまちづくりだけではなくて、現代社会の課題とか総合的な学習は、自己の生き方を考えることができるということが究極のねらいですが、人間が生きるということは、ジレンマをどうやってだましだまし、つじつまを合わせて生きていくかということで、その力を育てるということだと思うのです。その意味で市民教育、公民教育だと思うのです。

具体的なある場面での利害にぶつかったときに、それにどう関わり、どう処理していくかということは、経験の中で育ったものでしかないと思うのです。それとどう向かい合っていくかという助走から本番に向けての資質を、寺本先生は4つの段階で示し、中学校以降はもっと本番のどろどろしたところを抜けていかざるをえないのだと思います。そうなっていくと、大人になったときに世田谷のような、市民的資質の高い地域が形成されてくるということだろうと思うのです。

さっき面白いと思ったのですが、大学の先生のお話で、高層にするか低層にするといったジレンマが、都市計画にはあるのですね。その中でより複雑で高度な知識や問題解決を要するものと、構造がシンプルなものと段階的にもし構成できれば、それを螺旋状に繰り返していくと、複雑な問題をだんだん処理できるようになっていくのかなと思います。そして、それがカリキュラムの系列として可能かな、と思うのです。

■修学旅行でまちづくり学習を

○寺本　今のお話は、私のイメージするところは、例えば建蔽率や容積率の内容です。福川先生が岩波書店から全5巻の絵本（『ぼくたちのまちづくり』（福川裕一著／絵・青山邦彦、岩波書店）を出されていますが、その中に良い事例が書いてあります。それを先生方に読んでいただいて、小学生で建蔽率、容積率をどこまで理解できるかを、いま実験的に6年生の担任の先生にやってもらっています。しかし、大人でも建蔽率、容積率を知らない人が多いのです。これは大きなマイナスです。同じ面積をどのように使うか、低層平屋の町並みをよしとするか、それとも高層にしてたくさんの空き地を生み出すか。そういったことさえ分からないのです。

もう一つ、先ほど中学校のことを言われましたが、私は具体的にできそうな時間帯として修学旅行があるとにらんでいます。修学旅行は、ディズニーランドに連れてきて中学生を放して終わりという時代ではありません。どこかの村などに宿泊体験して、非常に濃密な人との触合い、自然との触合い、また勤労体験なんかも盛んに推奨されつつあります。修学旅行の時間を使って、学校の総意が得られれば、例えばユニークなまちづくりをやっている自治体に中学生が宿泊体験しながら、まちづくり学習を一緒に追体験する。そして、戻ってきたら、自分のまちに対して、それが一つのモデルとなり、複眼的な問題解決の力ができるということになります。それはまだ聞いたことがないですが、ねらい目として修学旅行を使って、行く前と後とを総合的学習の時間で準備学習とか、後のフォローアップの講座なんかも開いていくと結構面白い修学旅行前後の総合的学習が展開できるのではないかな、と思っています。

○奈須　建築の先生や寺本先生に伺いたいのですが、例えば、都市計画やまちづくりのことをめぐっていろいろなジレンマ、利害関係があります。そういうのは本質的に難しい問題と本質的にわりと易しい問題というのがあるのですか。それとも、それは説明の仕方で、つまりかなり難しいと思っていたことも教材化の仕方で比較的簡単にやれると考えたほうがいいのでしょうか。

■中・高校生のジレンマの問題

○吉川　多分最大のジレンマは、小学生で提案づくりまでいってかなり夢のある話ができ、それを大人が受けたり、発展させたりして実現していく方向というのがあるが、中・高校生になると、それをどう実現していくかということで、現実の社会構造に結びつくと思うのです。都市とかまちでは、一人ひとりが自分で良かれと思ってやっているうちに全員の首を絞めるということが出来てくるわけです。おそらく複雑な問題、特に自分たちの所有権とか住まいと、それからみんなを生かすためのルールとの関係が結構あるのです。そこが1つジレンマの問題なわけです。

もう一つ太子堂の中学校の例で、子どもたちが公園を造って、そこに地域の花壇と学校の花壇を造って、おじいちゃんたちと一緒にやろうよ、ということがありました。これは、自分たちはこういうことをしたい、ああいうこともしたいというような先の実現のプログラムというのを考えるな芽があったのです。そして、計画が出来たらそれに向けて次へ引き継いでもらおうね、と思っていたのですけれども、つぶれてしまいました。

また、防災からみると、小学生と中・高校生で圧倒的に違うのは、はっきりいって中・高校生は、戦力として考えられるのです。私は、それはちょっと批判的なのですが、中・高校生が自分たちで自分の活動を決めて、それを自分たちでプログラムを組んで実現でき、提案をどうしたら実際に実現するのだろうか、ということに中・高校生だったら突っ込んでいけるのではないかな、とも思うのです。

■防災からまちづくりへの導入は

○奈須　吉川さんへ、福田さんからの質問です。「地域と子どもが一体になる項目として避難所体験学習訓練なんかを行った事例はないのでしょうか。また、応急処置や負傷者対応などといった訓練なら地域の人と比較的容易に関係を持ちながら実践できるのではないか。まちづくりにいきなり子どもを連れ込むよりも、むしろ防災を前面に出すというのはどうでしょう」ということですが。

○福田（ボランティアグループA-yan Tokyo）　まちづくりというものを全く勉強してない人間からすると、まちづくりにいきなり子どもたちを連れていってしまうというのがどうも不自然で、私ですらまちづくりに興味がないのに、子どもたちがどうして持てるのだろうと思ってしまうのです。ただ、自分が災害にあったときに生き残れるか、家まで帰れるかとか、そういうことには興味があるのです。そうなったときに帰るためには、どうしなければいけないかというときに、まちを知らなければいけない。そういう発想からだったら、まちづくりはできそうな気がするのですが、いきなりまちづくりとなると無理なのではないかな、という気がするのですが、いかがでしょうか。

○吉川　避難所の話は全くそのとおりだと思います。それで、防災の役割というのは、学校から帰るときにもし地震があったらとか、または水害があったときにはこういうふうに困ったよね、みたいなことからやると自分の環境のほうへ向いていけるので、そういう意味でまちづくりへ導入するきっかけとして、見ていただいていいと思うのです。それで、避難所訓練とか、まちづくりと応急処置との関係の話なのですが、これについては実践

をしている梅津さんから、お願いしたいと思います。

■サバイバルキャンプから学んだもの

○梅津　私どもは20年来まちづくり活動をして、それがいろいろな形で波及してきて、その中でサバイバルキャンプができるようになったわけです。そのきっかけになったのは、文部省が1997年に、いじめ対策地域交流のモデル地区に太子堂・三宿地区を指定してきたわけです。ここなら地域活動をやっているから何かやってくれるだろうということであって、決して太子堂・三宿がいじめが多いからモデル地区にしたのではないという話でした。

そのときに何をやるかで、初年度は、震災の話を聞こうというところからスタートしていますが、ここは防災まちづくりをやっている地域だから地域交流の場としてサバイバルキャンプをやろうということで始めたわけです。太子堂小学校、太子堂中学、それから三宿小学校の３つの学校を対象として始めたのですが、２年間続けた結果、３年目から三宿小学校では、避難所体験ということで、最初は希望者だけ参加させていたわけですが、大変熱心な先生方がおられて、総合的な学習の時間として取り上げようということになったわけです。寒いので、夏にやってきたのですが、今年は、ＰＴＡから出た「おやじの会」の人たちが「地震なんていうのはいつ起きるか分からない」と言って、冬にやろうという提案があったのです。これは大変だということで、妥協策として６月にやったわけです。昨年から校庭にテントを張って、６年生はそこに寝るということにしたのですが、今年は、入梅の時期だからテントはやめようか、という話になったら、生徒のほうから絶対やるという意見が出て、それで生徒が自分でテントを張って、後でたたむという作業をやっています。

この宿泊体験を通していろいろなことを生徒も学び、先生も学び、我々も学んだことがたくさんあるわけです。反省会のときに女の先生が、１人のお年寄りと接触した中で自分の人生観を考え直すきっかけになるということを言ってくれました。要するに、そういう接触を通して先生自体が新しい学びがあったというで宿泊体験の１つの形態としてサバイバルキャンプというのが非常に有効だったのではないか、と思います。それから、子どもが興味を持つような内容を、子ども自身に企画させている。例えば、学校怪談というような企画は子ども自身に立てさせたとか、最初は学年別に教室に泊まっていたのですが、地域別に宿泊をして、６年生が低学年の生徒の面倒をみるということまでやったりしています。また、地域の大人も子どもたちと一緒に地域別に寝るのですが、そういう地域の人と生徒が地域別に宿泊することによって交流を図ることが、その後の日常生活の中でも活きていることで、非常に良い経験を積んでいると思います。

■防災教育のきっかけづくり

○吉川　きっかけは、いまのように、学校にみんなで泊まってみようよ、ということでいいのです。実際にかまどなどの楽しいことをやったりして学校の空間が普段と異なり、それで、眠れないということが出てくると思います。避難所は、実際に眠れないのです。そういうようなことも覚えながら、何でこんな所に来なければいけないのとか、地域の人が全部来たら、どうなるのとか、ちょっとした疑問が出るような機会があれば、そこからまちづくりへつながります。例えば、実際は、避難所というのは地域の５分の１ぐらいの人間しか入れないし、仮設住宅は家が本当になくなった人のうちの３割ぐらいしか入れないとか、そのような話からだんだん広がって、被害を出したらまちは終わりだね、というところへ行ってくれればいいし、それを理屈で考えるのではなくて、避難所訓練は楽しかったね、という中から、災害のときは大変だよ、１日ならいいけれども、毎日あんな所にいるのではいやだな、という話が出れば、防災教育としては水準が高いし、次のまちづくり展開というのも楽になると思っています。ですから、私も改めて学校を使いながらまちへ広げていくやり方をもう一回考えなければいけないかな、と思いました。

■子どもが関わり、大人が変わる

○小澤　地域の大人との交流で先生たちがいろいろな気づきをしていくことで新たな発展があるということで、地域の受け止め方というのもあるのですが、菊池さんから「子どもたちが関わることで、まちが変わることを見せることはタイミングもあり、難しいことです。しかし、むしろ大人たちが変わることを見せることがまちづくり学習の第１歩と感ずるようになりました」というご指摘がありましたが、本当にいまの話がそうだったのではないかと思います。それに加えて、「大人たちが変わる姿を子どもたちに易しく見せる方法についてアイデアがありませんか」というご質問になるのですけれども、いかがでしょうか。

○寺本　商店街のいろいろな店に取材にいかせたり、職人の技を取材にいかせたりと、そんな学習を通して、最初は子どもたちのマナーが悪いとか、すぐおしかりが教育委員会に入るなどのトラブルが結構ありました。でも、学校長も、そのときにしかってください、と言いながらまちぐるみで子どもを育てていこうという姿勢がだんだん出来てきました。子どもたちがこんなに真剣にまちのことを思い、まちの活性化やまちを好きになりたいと思う学習を子どもたちがこんなに真剣にやってくれる姿を見て、私たち商店街の者も、１度消えかかったまちづくりへの意欲が、もう一度やってみようか、と思い始

めました、という感想がある商店主から聞かされました。
○小澤　斎藤さんから「学習をやっていって、もちろん資質もありますけれども、子どもたちのやったことを先生たちとしてはどう評価していくのか」というご質問がありますが。

■子どもの提案がどう生かされるのか

○斎藤　先生が悩みとしておっしゃるのですけれども、子どもたちが提案をつくっても、その提案がまちに活かされてないと、逆に失望してしまう子もいるかもしれないということなのですが、例えばそうなったとき、そのプログラムは成功だったといえるのかどうか、というような悩みがあるのです。でも、まちづくりセンターでは、市民の人たちの自主的なまちづくりをサポートするという仕事をしているので、学校が、または子どもたちが一生懸命やることで、地域の大人たちが学習を継続するプログラムをどう作っていけるかというのとリンクできると素晴らしいな、と思うわけです。子どもたちからこんな意見があったけれども、こういうことについて考えてみようよ、というようなことを大人側が動機づけられるような仕組みが用意されているとすごくいいな、と思います。

■大人は、子どもたちの提案を温かく認める

○寺本　6年生の子どもがまち改造計画を出した場合でも、確かに市長に持っていったりしたときもありました。しかし、子どもたちの要望を我々大人社会は実現できないではないか、失望させるではないか、ということももちろん出ました。しかし、だからといってそのまちづくり提案というものは学習内容としてふさわしくないとはいえないと思うのです。西尾小学校では、子どもたちが出したまちづくり提案を周りの大人たちが一応認めてあげるという雰囲気を作ろうということをいつも呼びかけています。そして、世の中には優先課題がある。あるいは、予算を伴うことはすぐには改善できないのだ。だから、まちというのはなかなか変わらない部分があるのだよ、という現実を子どもたちに伝えていこうということをいつも配慮しています。そして、子どもたちも、なるほど、そう簡単に私たちの夢プランを大人というのは実現できないのだな、ということを知ることが大事なのです。つまり、そういう課題が存在することを知るということが非常に重要なのではないでしょうか。周りの大人は、子どもたちの提案をいかに温かく認めてあげるか。認めるということは、提案を実現してあげるということではないです。実現できないのだということを説明してあげるということが大事ではないでしょうか。だから、そういう場面が子どもたちにもよく伝わるように青年会議所の人たちが学校に来て説明するとか、こういうことはこういう問題があるとか、そういう相互交流をふやしていく必要があると思います。答えのない学習ですけれども、答えがないからこそ非常にリアルでいいのではないでしょうか。

■困難にぶつかっていくチャレンジの継続性

○木下　参加のまちづくりにおいて、提案しっ放しでいいのか、行政に対し文句を言えばいいという市民をつくっていっていいのか、逆に行政のほうの立場だと、苦情ばかり言いたいことだけ言って、俺たちの身にもなってくれとということになる。そういうできない仕組みがある。それをどう越えていくかというところに、いまいわれているパートナーシップというのがあると思うのです。複雑な問題に子どもたちがどう関わるか。そのときに、こういうのは難しいから諦めなさいといった対応でいいのでしょうか。

飯田の中学生のリンゴ並木の取り組みも初期の頃は、公共の場所にリンゴなんか無理だ、管理が大変だとか、一旦断られて、そんな中で子どもらはディスカッションしながら自分らでコンセプトを作って再度当たっていったわけです。自分らでもやれば変えることができたという感覚というのがあれだけ続いていったエネルギーの元ではないかな、と思うのです。子どもたちが必要と感じて提案し、その困難をぶつかっていくようなチャレンジの継続性をどう作っていくか。学校で、地域でそれをどう作っていくか。その辺は大きな課題ではないかな、と思うのです。

■行政とNPO、そして学校の立場

○細田　実際にいま携わっている仙台市南部の学校があるのですが、昨年度、5年生が120人で、その地域は区画整理事業がいま執行中で、そこを学区にしている学校が、自分たちのまちなので、未来のまちを子どもたちなりに提案させてほしいということで、3クラス全員がやりました。それのお手伝いをしたのですけれども、そのとき私はＮＰＯの立場で関わりまして、町並みデザイン課と同じ計画部の中に区画整理を担当する部署があるのですが、是非子どもたちの提案を聞きたいということだったので、それでは一緒にやりましょうということで、半分行政に足を入れながら半分ＮＰＯという立場で関わりました。

3カ月かけて子どもたちは、実際に模型を作る形で提案をしました。それで、子どもも、先生も非常に盛り上がって、今年度また続けたいということになりまして、6年生になって、区画整理全体を前にやっていたので今度は中央公園の部分の提案をさせてほしいということで、少し詳細にやろうということで始めました。ですが、公

園を実際に設計する部署は別な担当で、建設局とは局も違って、実際に公園を造るのはかなり先になるということで、結局、行政がみんな下りてしまって、残されたのはＮＰＯと学校だけになってしまいました。

しかし、実は今月の17日から学習が再スタートします。それで、中央公園を自分たちの公園としてどう設計したらいいのかということをこれから６年生と一緒にやろうということになっています。

行政というのは縦割り組織がありまして、そういうところの難しさというのを非常に感じます。だから、実際のまちづくりに下手に提案されても困るというのがあるのではないか、と思うのです。学校教育の中だけでやっている分にはいいのだが、それを行政側が、例えば材料費を出しながら一緒にやるということになったら。受け入れざるをえなくなり、後始末に困るということがあって引いてしまったという事例が実際にありますので、本当に難しいな、と思っています。

■苦しいことをみんなで分かち合う

○橋本（貝塚市役所）　私は、つなぎ役というのは非常に大事だと思うのです。地域の中に入って汗をかいてのやり取り、その中ではできるだけたくさんの情報を出してやっていく、ということです。川の分校を子どもの参画でやろうといったときに、まず子どもたちの活動を見てくださいと地域に呼びかけをしました。その地域（川の分校）は、学校の先生の間ではバルカン半島といわれているぐらい難しい地域なのです。というのは、戸建ての地域があって、府営住宅があって、新しく出来たマンションがあるのです。だから、防災なんかでも、新しいまちは、きちっとした区画の中で出てくる。古くからあるまちは、何年かかってそのまちが形成されたかというのを見ていただいて、そこに防災とか生活の知恵とか昔からのやり取りがある。そういうのを子どもたちに学んでいただいて、そこを比較する。例えば、昔は手押しポンプで人力でやって、そういうポンプではどこかの用水から水受けしたということもある。古いまちでできて、新しいまちでできないことなどと、いろいろな題材をやって、そして議論が出て問題点を見つけ出すことが子どもたちの成果になったらいいな、と思っています。苦しいことをみんなで分かち合うというのですか、そういうやり取りがあればいいな、と思っているのです。

■子どもによって、大人が気づかされる

○奈須　解決するということのイメージが随分違うのでしょうね。提案したものがどうなっていくか、行政がかかってしまうと「始末しなければいけない」という表現がありましたが、始末するのは子どもです。要するに、行政も一市民として、市民一人ひとりが、後始末をつけていく当事者にならないと、提案して押しつけているとか、受けた以上は何かしなければいけないという関係性が多分まずいのだと思うのです。

寺本先生や吉川先生のお話の中に、子どもがまちに関わって、まちづくりを展開することで、大人も、普段はぼうっと暮らして考えてなかったが、考えるようになるとか視点がはっきりしてくる。あるいは、行政の人も、そういう動きを受けて意識が変わってくる。子どもが動くことで大人が変わる、というのがありましたが、今日の参画ということの１つのテーマだという気もするので、１つ事例を申し上げて考えたいと思います。

さっきのジレンマについてなのですが、高知の坂本龍馬の生家があるという校区があって、そこに小さい川があるのです。地域の旅館組合の人たちが、龍馬が眺めていた風景ということで、観光の目玉にそこにニシキゴイを放そうとしました。子どもらは、龍馬が眺めていたときには、コイなんかいるわけがない。せいぜいフナだと言い出しました。一体あの川に何がいるのだと探しにいったら、なんと純粋の日本メダカが 800 匹生き残っていたのです。大騒ぎで、メダカ・トラストの人が来て、これは絶対に残さなければいけないとか、今度は環境課が出てきて、市としてこれは残したい。一歩間違うと大いに利害が対立する構造なのです。

ただ、面白かったのは、普通は、こうなると話が進まず、テーブルにも付かないのではないかと思うのですが、そこに、子どもが入ったのです。子どもは、あそこはコイではなくて、フナということで動き出したので、子どもが仲立ちになってしまうのです。子どもが仲立ちになって、「おじさんの気持も分かるよ。でもね、あそこにいるメダカはこうなんだって」と言われると、旅館組合の人たちも、子どもに言われてしまうと、となってしまうのです。最後は市長さんまで出てきて、もともと３面張りでやる予定のものを石組みにし、その後、網を入れて区画を区切り、環境課ゾーンと観光課ゾーンに分け、それぞれの部署が対応しようかという案が出たりするのです。これは面白い事例です。子どもが入ることで、大人が、大人げないことはできないぞということに気がついて関係性が変わってくるのです。

きっと太子堂の地域なんかでは、防災ということを核に、そういうことがどんどん起こってきたのではないか。西尾もそういうことではないのかな、と思うのですが、それが実は、学校教育が社会の変化についていくのではなくて、学校教育が次世代の子どもを育てるということを通して社会を変えていくということになるのかな、と思うのです。

■子どもの目線、感性の大切さ

○木下　子どもの目線を大人は忘れて しまっている。

それを思い出してもらう。そうすると、子どもから見て大人げないというようなことに気がつくのです。都市計画に、そういう子どもの目線はなかったのです。特に道路などは、車が通るための道路になっていて、道端から子どもらが消えてしまっている。そこにいろいろな問題が起こってくるわけです。大人自身が子どもの目線とか子どもの感性を取り戻すということは、すごく大事なことなのです。

だから、子どもだけでやるのではなく、大人が同じ場面にいるということです。太子堂のまちづくりでも、最初に歩こう会をやったときに、大人の発表に対して子どもが聞いている。子どもの発表を大人が聞いている。大人は、ブロック塀の問題とか道路の問題とか問題点ばかりあげ、とどんどん暗くなる。でも、子どもらは、この通りはコーヒーのにおいがするとか、小鳥がいっぱいいるとか良いところをあげてくる。そういう見方もあるのかというのを子どもから教わったのです。いままで行政からも、ここは防災上いちばん危険だとか、マイナスの課題で始り、地域の人も仕方なくやっていた。しかし、生活の論理がある。そういう地域の良いところは、子どもから気がつかされたというようなことがあったのです。

子どもの目線から見ると、自分らの生活もおかしいことが分かってくるのです。行政の仕組みや環境の問題はどんどん複雑化してきて、複雑という理由で我々はあきらめてしまうのだが、大事なことはもっと単純なことで、それに向かって動いていくことであり、それは公民教育にもつながるのです。丸山真男が、「民主主義というのは理念と運動と制度の三位一体だと。絶えず主権在民に向けて運動していかなければおかしくなる」ということを言っている。だから、自らの運動なくして前進はないわけであって、そういうことを子どもらと一緒にやる。子どもから刺激を受けて大人も動く。子どもも動く。そんな地域が出来てきたら面白いな、と感じております。

■子どもたちから教わること

○梅津　太子堂で、子どもの目線でまちを見る必要がある、ということを教えてくれたのは木下さんで、かなりそういうことを意識してやってきたつもりです。先ほど寺本先生が、子どもの提案が実現できないということを知ることも１つの教育だ、と言われました。私もそれには賛成です。しかし私たちは、社会経験からあまりにも現実的にものを発想することしかできなくなっている。要するに、自分たちが失ったものを子どもたちから教えてもらうということがもっとあるのではないか、と私は申し上げたいのです。

具体的な例でいうと、烏山川緑道という、昔川だった所にフタをして遊歩道にした場所があります。それがゴミ捨て場になったので、木下さんの提案で新しい再生計画というのを立てたわけですが、これに反対運動が起きて、木下先生も私もその調整に大変な思いをしたことがありました。ところが最近、太子堂小学校の子どもたちの総合的な学習の時間で烏山川緑道が取り上げられて、そのときに子どもたちから、川のほうがよかったという意見がだいぶ出たのです。実は、烏山川にフタをしたのは、どぶ川のようになって汚くなった。それから、川が時々あふれる。そういう事態に近所から苦情が出てフタをしてしまったという経過があるわけです。だけど、本当にそういう解決方法がよかったのだろうか。なぜ川が汚くなったのか。道路の舗装が進めば進むほど、家が立て込めば立て込むほど下水処理能力がなくて、大雨が降ると川が氾濫することをなぜ我々自身が考えないで安易にフタをしてしまったかという反省があるわけです。それが烏山川緑道のせせらぎ計画という形につながっていった面もあるわけです。

いまの社会的な価値基準の中に、子どもたちが考えている大切なことが失われているということを逆に子どもたちから教わる面があるのではないでしょうか。子どもたちの感性、子どもたちの理想とするものを、それは実現できないといって簡単に片づけるのではなくて、我々が失ったものを指摘されているのではないかと考えて、私たち自身がもう一度子どもたちから学ばなければいけないのではないかという感じを持っております。

○奈須　実現するかどうかという話はすごく難しい話です。横浜に東小学校という社会科の研究校があって、20年ぐらい前のことですが、ある地域にポストがない、何でポストがないのだ。どうやれば実現するのだ、と子どもが徹底的に探究してポストを付けさせたのです。すごい実践なのですが、翌年からその学校の先生たちは、ポストのなぞを探求する授業ができない。まちが良くなってしまうと、まち学習がやりにくくなる。おかしな話のようですが、従来の教科学習のように本の中の知識をやるのと、リアル・ワールドを扱うのでは随分と違うな、ということを感じています。

○小澤　高校、大学の授業の問題が出ましたが、学校の取組みに初めからプランナーが関わる、もう少し深まったところで専門家としてどう関わるかという議論が少し足りなかったと反省をしています。これがアメリカ、あるいはイギリス、ドイツなどを見ていますと、専門家がそれなりの専門性を持って関っていくところがあります。日本の場合、そこの深まりがなく総合的な学習のまちづくり学習まで行っていない、という実感をもっております。

子どもの視線でまちをつくることは、21世紀型のまちづくりがどういうことなのかを教えてくれる、すばらしいヒントになったのではないか、と思います。それでは、延藤先生のまとめに入りたいと思います。

<まとめ>

総合的なまち学習へ

延藤安弘 （千葉大学工学部教授、住総研住教育委員会委員長）

この総合的学習の経験というのは、それぞれが個別解、特殊解であるのだが、こういうことを各地に広げていくためには、一般解に至るチャネルを見つけることが大事ではないでしょうか。今日の議論全体を通して特殊解から一般解への回路を見いだすキーワードを上げて今後に備えたいと思います。

1. 論よりも地域密着型の課題を定めてわくわくプログラムを作ろう（Community Hint）

大事なのは、地域に着目して、我がコミュニティに総合的学習のヒントがいっぱいこもっているので、そのプログラムを作るのを実現していくために、まちを探検することです。

2. 合い言葉は「タンケン、ハッケン、ホットケン」（Action ・oriented）

井坂先生の有名な合言葉です。地域を具体的に巡り歩いて、実感のこもった体験学習をやってみよう。この合い言葉は、地域に出向いて実感体験していくアクション・オリエンテッドである、ということが重要な総合的学習を創造的に広めていくための基本的な手法であるということが語られていました。

3. 的確な表現の機会を生み出す（Oral &Visual Expression）

的確な表現の手法を大人たちは提起しながら西尾小学校の町を探検した後の紙芝居づくりや絵コントをはらんだ民話集や、あるいは三宿中学校の新聞づくりや多様な表現を行ったように、実感のこもった体験から一人ひとりの子どもに関わる大人も含めて、内からみずみずしい感受性が泉のようにわき上がっていることを、形や意味、あるいは絵柄の中に表現することによって、その意味することに至ることができるのではないか。表現は単にビジュアルな表現だけではなくて、紙芝居にもありますように、口頭的な表現とともにビジュアルな表現の世界を多様に開くことに、大人たちや先生方はどのようにサポートすることができるであろうか、ということが語られていました。

4. 内発的な気づきを促す（Starting from within）

いわば内から気づくという内発的な気づきという瞬間が、実は、意識という生命を子どもの心の中に呼び覚ます仕掛けではないか、と思います。外から押しつけられたテキスト内に閉じこもるような在来的学びではなくて、むしろ子ども自身が創造的な表現の体験を重ねることによって内発的な気づきを促す。"Starting from within"というのは、イタリアの有名な精神医学者のアザリオがキーワードとして提起している言葉ですけれども、人は、内から何かに気づくとき、心の悩みは瞬間に晴れたり、あるいは知識に対する、あるいはまちをつくり変えていくことに対する、自らの生き様に対する、これだこれだと思う瞬時に火がめらめらと燃え上がっていくような瞬間はすべて内側からであるということで、外側からの押しつけ型教育を越えていく総合的まち学習の重要な意味というのは内からの気づきではないかと思います。

5. まちの達人と出会おう（Open-mind）

そして、「まちの出来事のシミュレーションをやってみよう」です。西尾小学校の経験では、まちのいろいろな商店主に出会う。三宿や太子堂では、梅津さんや橋本さんに出会う。貝塚では橋本さんに出会える。まちの達人たちに子どもが出会ったときに、おもろいおっさんがおるやないか、ということで感動したり、まちづくりは何のことかよく分からないけれども、災害が起こったらこんなことが起こるのだというサバイバルキャンプをしたり、まちの将来像を子どもたちと共にシミュレーションで試してみる。まちの人々という他者、あるいは出来事という他者と開かれた関係を持つ。他者に心を開く、オープン・マインドを耕し続けるというプロセスを事あるごとに運んでいく。そういうことが総合的まち学習の視点であり、大事なことではないでしょうか。

6. 違（ちが）いと対立を力に変える（Response）

違いと対立を力に変えるという点では、三宿中学校の中学生たちが広場をつくるというときに、住民から不良中学生だといわれ、生徒会長の女の子が泣きながら、私たちは批判を越えて創造的なまちを提案するのだ、というので新しい提案活動をする。しかし、またトラブル続きであるというのがありました。そこで対立が起こったとき、とことん話し合う。相手を否定するのではなくて、むしろ相手との議論の応答を無限に繰り返していく。価値観やスタイルの違いを否定し合うのではなくて、応答しながら方向観を分かち合う。また、高知の龍馬の生家の川の魚問題による子どもと大人たちの対立も、少なく

ともお互いに何を目指しているのだ、という生きる方向観を分かち合う、いわば応答関係をつむぎだす状況づくりに子どもたち、大人たちの間をどのように結んでいくのか。子どもの目線は、対立を越える力になりうるのではないか。子どもの目線は、トラブルをエネルギーに変えられる仕掛けなのです。

7. 学び合う動的な関係づくり（Dynamic co-learning）

一方的に子どもに伝えるだけではなく、むしろ子どもから学ぶ。子どもと共に学ぶ。大人たちがやり過ごしてしまった、あきらめていたことが、実は、子どもがあらゆる時代に生命あるものと共に生きる川というものは何だ、というような問いかけを根底からしてくれる。あるいは、総合的学習にかかわる子ども、大人、先生、行政が共に学び合う動的な関係づくりということで、ダイナミックなコーラーニングという創造的な関係をつむぎだす過程に私たちはどのように身を置くことができるであろうか、ということが語られていたように思います。

8. 習慣と瞬間（Empowerment）

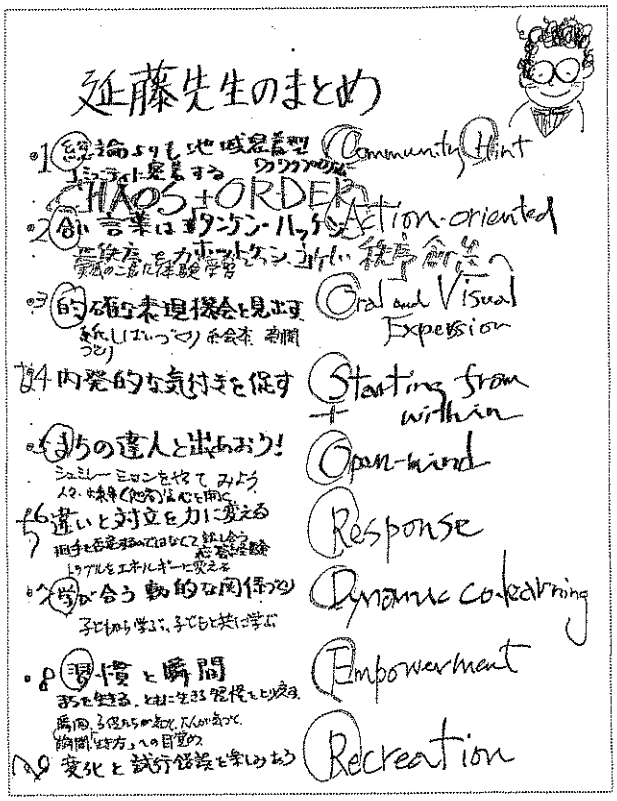
今では、人と人の間が切れ切れになっているけれども、まちというのは、常日ごろ何かあるとき一緒に支え合わないとうまくいかないのだ、という習慣をどう取り戻すか。まちに生きる。共に生きる。支え合う。緩やかにつながり合うという習慣の回復・再創造ということが総合的まち学習の裏に隠されているテーマであるとともに、瞬間、子どもは気づき、瞬間、大人たちは、何を目指して生きるのだ、という生き方の目覚めが突然訪れてくるのです。創造的な持続過程をはらみながら、地域の内なる力を高め、地域の教育力をたゆまず創造していくという瞬間と習慣を共にしながら、コミュニティ・エンパワーメントのプロセスにどのようにつながり合う仕掛けを生み出されるかが、良い総合的な環境学習と、どうでもいいというやつとが分かれていくのではないか、と語られていたように思います。

9. 変化（へんか）と試行錯誤を楽しみ合う（Recreation）

制度、あるいは、物、金、時間の不足、先生方の過酷な労働時間、地域の住民の態度など、状況はしんどいことがいっぱいという話がありましたが、しかし何らかの形で変えようとするなら、その変わる過程というのは、試行錯誤の過程なのです。でも、これはしんどい、駄目だと思ったら3日で終わるが、梅津さんや橋本さんも太子堂、三宿に20年間子どもと一緒に、住民と一緒にまちづくり、まち育てに関わってきて、こんなに楽しいことはなかった、そういうニュアンスが言葉の裏に隠されていたのではないかと思います。変化と試行錯誤を、子どもたち、大人たち、いろいろな人と楽しんでしまう。先行きが容易には見えないという状況をかいくぐりながら漂流することを楽しみながら、宝島を共に探り当てようというレクリエーションに変えてしまおうではないか、というしなやかな、したたかな視点が議論の合間に隠されていたように思います。

最後に、これらの頭文字を縦につないでみますと、なぜか「総合的なまち学習へ」になりました。皆さん方の創造的な議論を通して、なんて素晴らしい内容をわずかな時間に共有しえたのであろうかということで感動しきりです。そして、全国の学校や全国のこれからの総合的学習が展開することにつながるような、そういう一般解へ向けての視点、作法、方法的切り口が見事に言い当てられていたように思うわけです。

ところで、英語もキーワードとして添えました。CHAOS+ORDER となるのですが、カオスとか無秩序とか対立とかいうものを生かしながら創造的対話の世界に赴いていくことによって新しいオーダーという秩序を生むのではないか。いわば総合的な学習というのは、はじめは無秩序、混乱、罵倒、批判、非難というものがあるが、無秩序を力に変えつつ、新しい学校教育と、新しい地域と学校の融合するまち育ての仕掛けに、私たちは創造的に発展しうるのではないか。こんなに大変な難しい課題を未来に向かって開かれた示唆をお互いに共有できたことに感謝し、また実践とさまざまな皆さん方の知恵を寄せ集めて次の機会にさらに高みに上っていきたいと思います。ありがとうございました。



▲ 当日のファシリテーショングラフィックから

（財）住宅総合研究財団では、1993年より住教育委員会を設置し、住教育フォーラム等の活動を行っております。また、各分野、学会に分散している住まい・まち学習関係者が分野を越えて集い、成果・情報を交換・蓄積していくために論文集の作成・発表を実施しております。

第3回の本年度も学校教育・都市計画・建築・まちづくりなど幅広い分野の方々から、20編を越える実践報告・論文が寄せられました。お寄せいただいた論文の中より、いくつかの論考を発表していただき、これからの住まい・まち学習の方法を討議したいと考えております。

多くの方のご参加をお待ちしております！

財団法人　住宅総合研究財団

第3回
「住まい・まち学習」
実践報告・論文発表会

日　時：2002年3月9日(土)13:00〜17:30（終了後、同会場で交流会を開催します）

会　場：三茶しゃれなあどホール「オリオン」

（世田谷区役所三軒茶屋分庁舎5階、下記地図参照）

参加費：無料　（＊ただし交流会会費500円）

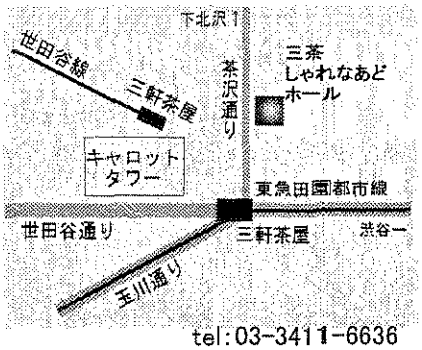
定　員：150名（申込先着順、お断りする場合のみ連絡いたします）

申　込：①氏名、②所属、③連絡先住所（所属か自宅か明記）、④電話、⑤FAX、⑥E-mail アドレス、⑦交流会参加予定を記入のうえ、E-mail:hirai@jusoken.or.jpか、fax:03-3484-5794 で住教育担当にご連絡下さい。

主　催：（財）住宅総合研究財団　住教育委員会

委員長　延藤　安弘（千葉大学工学部教授）

委　員　小澤紀美子（東京学芸大学教育学部教授）
木下　　勇（千葉大学園芸学部助教授）
町田万里子（筑波大学附属小学校教諭）
細田　洋子（建築と子供たちネットワーク仙台代表）
奈須　正裕（立教大学文学部助教授）



tel:03-3411-6636

東急田園都市線「三軒茶屋」駅徒歩3分

（世田谷区太子堂 2-17-6）

住・まちづくりフォーラムかわら版　14
発行日　2002年2月13日（非売品）
発行人　峰政克義
発　行　(財)住宅総合研究財団
〒156-0055　東京都世田谷区船橋4-29-8
tel 03-3484-5381 fax 03-3484-5794
URL　http://www.jusoken.or.jp
事務局　永田一雄、平井なか